

1 松野自得句碑（城南公民館敷地内）

「人の一生いつも木の芽のふくやうに」

松野自得は、明治二十三年（一八九〇）、勢多郡荒砥村大字東大室（現前橋市東大室町）最善寺に生まれた。県立富岡中学校に入學したが、東京駒込の曹同宗中学校に転じ、さらに東京美術学校日本画科に学んだ。大正九年の第一回帝展にも入賞している。埼玉県比企の竜蔵寺住職のころ、写生文「蠅とすずめ」を『ホトトギス』に投稿した。高浜虚子に認められ、以来虚子門下となった。郷里の最善寺に戻り、昭和二十三年「古趣創生」を掲げ、俳句雑誌『さいかち』を主宰、全国に多くの誌友や門弟がいる。

冒頭の句は、木の芽のもえいずる春の句と思われるが、人の一生も木の芽のもえいずる春のように気持ちを一つまでも若々しくしていきたい、という願いを込めたものであろう。筆者も気持ち落ちこんでいる時などこの碑の前に立つとなぜか勇気づけられるようである。

句碑は、昭和三十六年に旧城南村の庁舎竣工の記念に建碑されたものである。その後旧城南村は、昭和四十二年五月一日に前橋市に編入されたが、句碑は往時のままにその姿をとどめている。

*城南公民館記 *参考文献「群馬の句碑」丸山知良著、「群馬の文学碑めぐり」田島儀一著

*城南公民館だより「城南」平成17年3月15日号掲載



松野自得の句碑

2 大正用水の功労者・中沢直次顕彰碑（城南公民館敷地内）

かつての城南地区は、近くの池や沼の水を灌漑用水として用いていたが、雨が降らないとすぐ水が涸れて水田面は亀裂し、農民は雨乞いなどをして神仏に祈るより仕方がなかった。水不足の時など徹夜で水番にあたり、また各地に水争いが起こって血なまぐさい流血の惨事が耐えなかったという。

こうした状況を憂い、大正用水の掘削に尽力したのが中沢直次氏であった。大正十五年に県会議員となった中沢氏は、地元の関係者と大正用水期成同盟を組織、推されてその会長となり、昼夜をわかず東奔西走し、昭和十八年四月には同用水耕地整理組合設立の認可を取り、昭和十九年五月ついに起工式が行われ、昭和二十年八月には第一区間の通水に成功した。しかし、中沢氏は、長期間にわたる過労から昭和二十年十月四日六十歳にして急逝した。氏は永眠されたが、その遺志を継いだ地元民や関係者の奮起により残る工事も順調に進められ、今まで荒廢地であった原野にはとうとうと清浄な水が流れ、不毛の地は美

田に生まれ変わったのである。

氏の功績をしのび、昭和三十一年四月二十五日旧荒砥村役場（荒子町）敷地内に群馬県知事北野重雄氏の篆額てんがくによる顕彰碑が建立された。顕彰碑はその後旧城南村発足にともない移設され、現在も前橋市城南公民館敷地内に鎮座し歴史の移り変わりをみつめている。

*城南公民館記 *参考文献：「上毛人物めぐり」萩原 進監修・「荒砥村史」鹿沼明著

*城南公民館だより「城南」平成17年4月15日号掲載



公民館の駐車場南にある顕彰碑

3 赤石城懐古①（飯土井町）

現在の飯土井町は、大型機械による土地開発の推進、道路の造成、住宅の新築・更新等により町の様相も一変し本当に今浦島の観があるようである。

城山の現地に立って城址の要図と現況を較べ、往時を偲び「つわもの共の夢の跡」を懐古するのも、また、意義のあることと思われる。

それでは、城址の要図について私見も入れて概説したいと思う。

本丸Ⅱ城の中心部にあり、最も主要な郭くわを築いた所。土居Ⅱ城の防御のために郭の周囲にめぐらした土塁で、その外側に掘った壕さうの土で高く築いた。虎口Ⅱ城壁の門に枡形を造り、曲って出入りする要所である。壕Ⅱ空堀で本丸をコの字形にめぐり、交通壕としていたようである。腰曲輪Ⅱ本丸に添って西側に南北に長く築かれ、崖を登る外敵に対する防御の造作が施されていたものと思われる。帯曲輪Ⅱ本丸の東側に壕を隔てて帯状に

築かれ東方から来攻する外敵に対する防御の造作が施されていたと思われる。

*協力Ⅱ伏島利雄記（飯土井町）

*協力Ⅱ荒砥史談会

*参考文献・「群馬県古城址の研究」

*山崎一著「荒砥村誌」鹿沼明著「飯土井町誌」関根久濟編集

*城南公民館日より「城南」平成17年5月15日号掲載



4 赤石城懐古② 赤石城址の輪廻塔(飯土井町)

郭Ⅱ南北の郭には地侍の屋敷等があり周りに土圍や柵等が築かれていたと思われる。堀切Ⅱ西端が切り放たれた壕で丘陵伝いに来攻する外敵と隔絶し、中間に「折」があり、堀の内側の一部は現存している。追手虎口Ⅱ城の出入口で城戸(木戸と思われる)があり、場合によれば城戸を開いて逆襲するよう配慮した造作(武者屯等)が施されていたようである。

文献によると、赤石城は文明・長享の頃(一四六九〜一四八九)赤石道林がこの地に築城し、大永の頃(一五二二〜一五二八)には佐波郡(伊勢崎市)に移築したと記録されている。

城の東北部は堀切によって防御したものと考えられるが、現在その位置は特定できない。なお、東北は赤石城の鬼門にあたり、その除けとして大日如来の石像が祀られていたが、圍場整備により現在は飯土井町公民館内に移設されている。往時は赤石城も壯観でロマンもあつたようである。



赤石城址の輪廻塔

*協力Ⅱ 伏島利雄記(飯土井町)

*協力Ⅱ 荒砥史談会

*参考文献Ⅱ「群馬県古城址の研究」山崎一著「荒砥村誌」鹿沼明著「飯土井町誌」関根久濟編集

*城南公民館日より「城南」平成17年6月15日号掲載

5 二宮昔話 「天の宮の大蛇」

昔々、中島の西に「天の宮」とよばれる所に大きな森があった。三かかえもある大きな杉が沢山あって、中は昼間でも薄暗く寂しい場所だったと。そこにいつの頃からか大蛇が住み着いたと。

二之宮はもともと水の余り無いところだったので、米を作る為にあちらこちらに溜め池を作って田植えしていたんだと。天の宮の前にも大きな溜め池が有ったんだと。

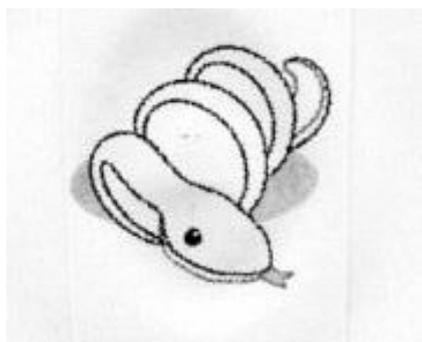
ところがある年から田植えの頃になると水が無くなってしまい田植えができなくなって、人々は大変困ってしまったと。それからというものいくら皆で水を溜めても、朝になるとからからに干上がってしまっとうしようもなく、皆で相談したところ「こらあ天の宮の大蛇が飲んでしまっうにちげえねえ」とゆうことになって、「蛇にはかなくせ金屎（鉄屑）が毒だというから、そいつを沼に入れべえ」とゆうことになって、皆で沢山の金屎を溜め池に投げ込んだと。そんなことは知らず大蛇はまた水をたら

ふく飲んだと。だからたまったもんじやない。大蛇はのたうちまわって雲を呼び風を呼び嵐を起こして赤城の大沼に飛び去ったと。それからは溜め池の水は涸れなくなって、人々はその溜め池を「金屎沼」とよんで大切に使ったと。

*細野とり語り（二之宮町）

*協力||荒砥史談会

*城南公民館だより「城南」平成17年7月15日号掲載



6 二宮昔話 「ごんべ川(宮川)」

昔々、二之宮町の中里にごんべえという大層魚捕りの上手な人がいたんだと。ごんべえさんは、毎日毎日西つ川(宮川)で魚を捕ってそれを百姓屋へ売って暮らしの足しにしていたんだと。

ある日ごんべえさんは、いつものように西つ川で魚を捕っていたと。けれどもその日は一匹も魚が捕れなくて「みようだなあ」と思っていたら急に釣り竿が重くなったんだと。「こりやあ大きな鯉でも掛かったかな」と思って力いっぱい引いたと、なんと釣り竿に掛かったのはカッパだったと。カッパも驚いたが、ごんべえさんもおどろいたんべえ。カッパは平謝りに謝って命ごいをしたと。

そこでごんべえさんは、カッパに「たまにこの川で川流れでおうちぬ(死ぬ)子供がいるが、それはおめえの悪さだんべえ。どうだ、これからこの川に水遊びに来る子供は皆俺の身内なんだから、以後いつさい悪さをしねえか」とカッパに言うと、カ

ッパは「へえ、じゃあ川に水遊びにくる子供が『ごんべえ、ごんべえ』と言ってきたら、皆お前さんの身内とわかるからそう言って入ってくんな。きつと悪さはしねえから」と約束したと。ごんべえさんは、「ほんとだど」と念をおしてカッパを許してやったと。それから、水遊びに行く子供たちは川に入る時「ごんべえ、ごんべえ」と言って入ったと。それからというもの、誰言うとなく宮川を『ごんべ川』と呼ぶようになったと。

*細野とり語り(二之宮町)

*協力 荒砥史談会

*城南公民館日より「城南」平成17年8月15日号掲載



7 富田町の少将塚

天正の中頃、京都から北面の侍であった延澤右近少将高家のべのさむらうこんしょうしやうたかいえ卿きやうの嫡男御代磨君みよまろぎみが富田の地に居住したといわれる。内室は、当国峰村御城之住人北条丹後守高広の家臣田中大弐きたじやうの娘せんだいじんという。なお、この地には、天正十六年（一五八八）から元和八年（一六二二）の間、転入した二十五人の記録『上野国勢多郡富田之郷根元記』は、元和九年に書かれたものである。

延澤氏は、遺言で当時荒砥川の氾濫で頻繁に被害のあったこの場所（富田町の最南東で荒砥川沿い）に、水害を防ぐために自分を埋葬するようにと言ったと伝承されている。

氏亡き後、この塚は、少将塚として地域住民から後々まで慕われ管理されてきた。その後、氏の縁者といわれる町内の信澤氏が管理した時代もあったが、近年は荒れ放題となり、現在は荒砥史談会の地元メンバーが清掃している。管理者は富田町自治会である。

現在地にある馬塚は、信澤氏が当時白い馬に乗っていたとい

う伝承から、荒砥川の対岸にあったものをこの地に移して祭っているものと伝わっている。

*富田町古老談

*協力・荒砥史談会

*城南公民館だより「城南」平成17年9月15日号掲載



荒砥川に接してうっそうと樹木が茂る少将塚

8 柘植(つげ)の木の由来 (城南公民館敷地内)

城南公民館南側植え込み内、松野自得歌碑の東隣にある柘植つげの木は、元々市内小島田町のお寺(長明寺)にあったものである。戦国時代、上杉謙信が大胡城(城主大胡太郎)を攻めたとき、戦に勝つたらもつと大きな寺を建ててやると近隣住民を騙して、大きな建造物であったこの寺と、江木町の貴船神社、富田町の正法院の三カ所を焼き払わせ松明代わりにして時の声を挙げたという。柘植の木はその時の火災で激しく損傷している。長明寺は、小島田町字大門跡にある阿弥陀仏(仁治元年一二四〇年、県内最古の板碑)の北方に位置していたという。

明治十年(一八七七)十月、政府が勧める神社統合に村人が協議し、稻荷様、赤城様、春日様が合祀されて富田の三柱神社となった。その時に神社総代等が交渉して譲り受け、大八車に乗せて小島田町から引いてきた。昭和三十二年一月二十日城南村合併によりスタートした新しい役場に、それぞれ大字から何か寄進しようということになり富田町から寄進したものである。

したがって、この柘植の木は少なくとも数百年は経っているもので、幾多の歴史に翻弄されながらも今日まで生きてきた大変貴重な木で、現在、三柱神社にある柘植の木はこれより分岐したものである。

*富田町古老談 協力||荒砥史談会

*城南公民館だより「城南」平成17年11月15日号掲載



富田町から寄進された柘植

9 泉沢町の秋葉様

泉沢の北東部の小丘に秋葉様を祀る石殿があり、それは、享和三年（一八〇三）八月の建立である。

大規模な農業改善事業が行われるまでは、桜の老木が数本あったが、今は榊が二、三本あるだけの寂しい石宮である。

泉沢町は毎年九月六日、この秋葉様の灯籠まつりをしてきた。かつては蚕の給桑を終えた村人がちようちんを手にぞろぞろとお参りし、大変賑わったものだ。

昭和四十年頃までは村の男子青年団員によって灯籠まつりが執り行われたが、時代の変化で青年団が解体したため、子ども会がこれを継承、現在に至っている。

秋葉様は静岡県浜松近郊の秋葉山の神で、『火之迦具土神』を祭神とする「火伏せ」の神である。江戸中期頃から日本全国に広く信仰されたといわれている。明治三十九年の神社合祀令によって、泉沢神社へ合祀されたが、地区の信仰対象を失った住民は不安に思い再び元の場所へ祀った。それは戦後のことだっ

たようである。石宮の刻字を見ると、村中を代表する四人の氏名が読みとれるが、この時期当地でも秋葉講が盛んだったものと思われる。

村の平穏を願い、悪霊の侵入を防ぐため、村境に秋葉様を安置し祀った先人に思いを馳せる灯籠祭りである。

*木村淺治郎氏記（泉沢町） *協力||荒砥史談会

*城南公民館日より「城南」平成17年12月15日号掲載



火伏せの神として絶大なる信仰を受ける秋葉石殿

10 密かに守ったキマラ薬師（泉沢町）

伊勢崎・大胡県道の西へ二〇〇^{メートル}ほどのところに向原の石殿・石仏群がある。その中にキマラ薬師といわれる石仏がある。キマラとは金魔羅^{きんまら}のことで、善事を妨げ人命を害すという意味がある。やがて僧の修行を妨げる隠語となり、男性生殖器をさす言葉へ転化した。男根の生の根源や神秘に薬師如来を合体させ、より強い法力を得るために造られた。

文政三年（一八二〇）六月、願主清水伊兵衛の建立である。御嶽講中の人々によって四月八日に例祭、七月十六日に灯籠が点けられている。三十年ほど前までは、例祭には桐の木で男根を作り、わらで女をかたどってその中に五目飯を詰め、それを奉納した。

医学医療に恵まれない遠い時代、下の病の快癒と子宝、子育ての恵沢を祈願、しいては五穀豊穡を願って、率直な気持ちで祀ったものと思われる。そのためか、ここでは講中の総代が、誰にも知られないように田畑の一角に埋蔵し、例祭の時だけ掘

り出してきて安置した。祭りがすむと、また人知れず埋蔵し守ってきた。この繰り返しは、つい十年ほど前まで続いたが、いまはコンクリートで台座がしつかり固められている。

*木村淺治郎氏記（泉沢町） *協力〓荒砥史談会
*城南公民館だより「城南」平成18年1月15日号掲載



神秘的な法力があるとされる金魔羅薬師如来

11 今井神社と観音様

今井神社古墳をはじめとして、荒砥川東岸一帯には、五世紀から六世紀にかけて十五基の古墳が築造されて大古墳群を形成していた。

往古より幾度となく繰り返されてきた荒砥川や古利根川の水害に苦しみ、救いを神仏に求めていた。

里伝によると、いつの世の昔か、出水で川が氾濫して富田の観音様が流れ出し、小高い今井神社の社地に漂着した。観音様はこの地にあつて、慈悲を里人に施し慕われたが、富田へ帰らなければならぬので、名残惜しむ里人に分身を残していった。以来、今井の里人は分身の観音様を勧請してきたという。

観音様は安産子育ての靈験で、その功德は遠郷近在に知られ、多くの信者から尊崇され仏果増進^ご利益を与えている。

今井神社は字三木堂の赤城神社と中今井に祀られていた菅原神社を移したものである。神仏分離などの歴史を経て、古墳上の前方部に観音様、後円部に神社を祀った。観音様は厄除け観

音で、後部神社は菅原道真公を祭る学問の神であり、子供らが天神講をやって神に祈ったものである。

祭日の十月八日は、青年団が主催で余興をして近村からも大勢の参拝者があり、参道の両側には出店が並んで広い境内を埋め尽くした。テレビやラジオが普及した今では、想像もつかににぎやかさだった。

*協力〓齋藤卓治記（今井町） *協力〓荒砥史談会

*城南公民館だより「城南」平成18年2月15日号掲載



今井神社古墳前方部に祀られている観音様

12 郷倉について（今井町）

国道五十号線が荒砥川を渡る橋の名を「御蔵橋」と言い、かなでは「おくらはし」と書く。

国道五十号線は昭和初年に開通したもので、「御蔵橋」もその時架けられたものである。その橋の名は旧幕時代の郷御蔵から出たものであろう。

今井町の「御蔵橋停留所（上り線）」の西に「郷御蔵」はあったもので、今では国道拡幅のため明確な位置はわからない。

普通「郷蔵」とは、江戸時代、各村もしくは数ヶ村に一ヶ所設けられた公共の倉庫をいう。建物は官有か村有であったが、敷地は除地または課税免除の扱いを受けた。目的の上からみて

- ①年貢米を城下または他の目的地へ輸送する前に一時保管するもの。

- ②備荒貯穀用（凶荒・災厄に対する準備をする）もの。

- ③両者兼用のもの。

などに分類される。①は支配人の検分がすむまで、年貢米保管

の責任は村側にあったから、村ではその安全を保つために郷蔵番を置くなどして警戒にあたった。

- ②は米、麦、雑穀などを分限に応じて農民に蓄えさせ、凶作のとき、あるいは平年にも、それを農民救済のために貸与または給与した。貸与した分は年賦で回収することにした。また、年ごとに新穀に詰め替えて腐損を防いだ。この意味での郷蔵は江戸中期に入ってから多く、昭和になっても東北や北陸に多くあった。

この地域にどんな風にあったかわからないが、江戸時代の租税制度を考えてみると、郷蔵の分布は今の町内毎か或いはそれ以上にあっただけであらう。

*故中沢右吾氏の文書より

*協力＝荒砥史談会

*城南公民館だより「城南」

平成18年3月15日号掲載



郷倉を表現している御蔵橋の欄干のレリーフ（井田安雄氏のアイデア）

13 「産泰さま」①（下大屋町）

下大屋町に鎮座する産泰神社は、その社名が示す通り安産・子育ての神様である。赤城火山期の流れ山がおだやかな田園に屹立した明神山があり、その姿はまさに懐妊した女性を思わせる。御祭神は安産・子育ての守護神である木花佐久夜比売命。古くより「産泰さま」と呼ばれ無事出産と、子供の無事成長を願う参拝者が県内はもろろんのこと関東一円からも数多く訪れる。本殿の裏には岩石が累々と堆積しており、原始古代から自然物崇拜の信仰の土地だった事が推察される。

神社の創建は履中天皇元年であると伝えられているが定かではなく古代及び中世の歴史は不明である。現在の社殿のなかで最初に建立されたのは本殿で棟札によると『宝暦十三年癸未四月二十三日 奉造立産泰大明神 神主 小糸豊前守藤原忠安 年五十一歳之建立』とある。

本殿は多くの彫刻で飾られており、上段には二十四考より「老來子」と「唐婦人」更に謡曲の「高砂」の彫刻がある。下段に

は唐子遊びの彫刻や火災除けの願いがこめられた水鳥や波の彫刻等がある。

幣殿の建立年代については棟札等がなく不明である。

拜殿は棟札によると『産泰大神宮 奉造替御拜殿成就 神主 従五位藤原恭富（鯉登恭富）文化九年壬申八月十三日』とある。

この時恭富は、鯉が小糸川を登る夢を見て氏を小糸から鯉登に改めたという。

*協力Ⅱ鯉登茂行記（宮司）

*協力Ⅲ荒砥史談会

*城南公民館だより「城南」平成18年4月15日号掲載



産泰神社拝殿



産泰神社本殿

14 「産泰さま」②（下大屋町）

大工棟梁については、信州諏訪の大隈流矢崎久右衛門であることも棟札により明らかになった。又、産泰神社には抜けビシヤク奉納の奇習があるが、これは大隈流の代表的な仕事である諏訪大社下社にも同じ抜けビシヤクの奇習が見られることから、諏訪の職人達によって当神社に伝えられたものと考えられる。

随神門については、『奉新爾造上随神門成就上棟之所 神主鯉登豊前守藤原富房 天保四癸巳年三月吉日』と棟札にあり本殿より遅れること七十年後に建立された事が明らかになっている。現在、本殿・幣殿・拝殿・随神門及び境内地が十八世紀中期から十九世紀初頭の本県神社建設の指標となる貴重な遺構であるとの理由で県重要文化財に指定されている。

又、古くから太々神楽が伝わっている。江戸時代後期に伊勢詣りが盛んになり、この参拝団のことを太々講と称した。その講の人々によって伝えられた神楽を北関東では太々神楽という。現在、「返陪」「四神」「宇受女」「岩戸」などの神話を題材とし

た式舞と「つり」「打ち出し」などの動作を面白可笑しく舞い、人々を楽しませる愛嬌舞など合わせて二十三座の舞が伝えられている。

*協力||鯉登茂行記（宮司）

*協力||荒砥史談会

*城南公民館だより「城南」平成18年5月15日号掲載

15 甲子大黒天（荒口町）

荒口町にある甲子大黒天きのえねは、文化年間（一八〇四〜一八一八）観音寺十四世住職現充鏡明の時代に、信州高遠笠原村の住人、赤羽惣吉・好広父子の彫刻によるものである。他に類を見ない秀作であるといわれる石像で、大國主をかたどる「福の神」といわれている。大黒天は当初観音堂と庫裏の間の台座の上に安置されていた。

古くから「福の神」として崇敬されていたようであるが、昭和九年、熱心なる氏子をはじめ敬神の念の厚い諸賢の後援を得て、初甲子に御堂を新築し、「大黒天」を安置奉って広くこの地の御守護と開運のための代参講をつくり、家内安全・蚕穀豊熟の祈願を執行するとともに、崇敬者各位に五人一組の講の組織作りを行った。不況の時代でもあり講の数は年毎に増加し全盛期には五十講を超えるほどになった。特に日中戦争以降、家内安全の祈願は出征兵士の武運長久の願いと結び付き隆盛を極めたようである。

その昔、大黒天は北に向いていた。そのためか上組が豊かで下組はそれに劣っていたという。そこで下組の嫉妬心がつのり、大黒天を南向きにした。果たせるかな大黒天の利導は掌を返すが如く下組が優位に立った。御堂の新築移転の際東向きに安置したところ、現在の東地区は運動公園、鶴が谷団地等が設けられ大発展を遂げ現在に至っているという。

戦後、信仰心も次第に薄らぎ、講も自然消滅してしまったという。

*協力〓藤倉治郎記（荒口町） *協力〓荒砥史談会



甲子大黒天像

*城南公民館日より
「城南」平成18年6月
15日号掲載

16 郷土の偉人・阿部耕雲（荒口町）

文化十一年（一八一四）正月十五日荒口村に生まれる。通称耕太朗、後に耕雲と号す。幼少より学を好み、天下の大学者を志し、若くして江戸に出て久留米藩の侍講岡永松陽の門に入り漢籍を修めた。また、藤森恭助及び鷺津貞助に就き詩文を修めた。

文久元年（一八六一）だいがくのかみ林大学頭の門に学びその後帰郷して自邸内に一字を設け、これを読書の堂とし晴耕雨読の生活を送ったことから耕読堂と称し私塾を開いた。入門を希望する者が非常に多く数十里離れた所からも入門者があったということである。

氏は常に気節を重んじ、貧困な者には夜食を給し学ばせた。又好んで多くの古典古書を購入し蔵書は倉に満ちていた。明治元年九月岩鼻県巡察使から学業勉励の褒賞を給わった。

明治三年、足利、金沢両文庫再興の目的を立て、その資金を得るために下総国印旛沼を開墾し新田を作ろうと計画をたて、

国の許可を得て開墾局を設け目的の資金を得るとともに窮民に自活の道を与えようとした。慶応二年（一八六六）、伊勢崎藩士中沢三郎が私塾ぎけいどう祇敬堂を開設し、耕雲は講師として招聘しょうへいされ、その際数百部の書籍を贈った。明治九年八月、東京氷川町仲猿楽町の浄土真宗教務院の漢籍教授に招かれた。明治十年三月下谷練堀町において私塾広済学舎を開設した。

明治十一年二月に故郷に帰ったが、病に冒され同年四月二十六日に逝去した。「耕読堂之碑」は明治十一年二月に門人が相諮って荒口町の邸内に碑を建てた。

*協力||藤倉治郎記（荒口町）*城南公民館だより「城南」平成18年7月15日号掲載



耕読堂之碑

17 松野自得先生を偲んで

「一步登れば一步に佛夏木立 自得」

「さみしさは月の光にふる落葉 寿女」

広島市西区三滝山寺境内

この句碑建立の経緯を弟子である国友枋坊氏は次のように語っております。

昭和三十三年六月八日、自得先生を三滝寺に迎えて歓迎句会を催した際、枋坊氏が自得先生の天賞として頂いた右の句の短冊を、庫裏を拝借したお札にと住職天俊師に差し上げました。

和尚はこの短冊を一目見て、「ああ、これは素晴らしい句だ、この句は参拝の人々の心を欲界から遠ざけ、一步一步登るに従って諸仏を礼拝し、供養し法悦に浸かって行く様に手引きをしてくれる好適な作品と思った」と、まだ一面識もない自得先生のこの作品を即座に句碑にしたいと言ひ出され、自得先生をびっくりさせました。そして、その翌年の五月三日に和尚自らの手によって建立されました。

この句碑が建立されて五年が経過した昭和四十年、三滝寺住職天俊師は、自得先生お一人の句碑では淋しからうから、奥様の加寿女先生の句碑を並べて建てたいと申し出られた。碑石を戸河内の山奥から見付け出して運んで建立され、昭和四十年十月十七日、自得・加寿女両先生をお迎えして除幕式が行なわれた。これが自得先生と三滝寺を結ぶ御縁となりました。

この句碑建立の経緯は、自得師の人柄を偲ぶに相応しいものと思えます。

*協力 馬場勝正記（下大屋町・「自得・加寿女句碑」著者）
*城南公民館だより「城南」平成18年8月15日号掲載



18 郷土の偉人 井上正香（西大室町）

井上正香は文政二年（一八一九）八月、西大室に生まれた。名は貞輔、後に正香と号した。若くから学問を好み、十八歳のころ江戸に出て国学、医学、書道、漢詩など幅広い学問を一流の先生に学んだ。二十一歳ころ郷里に戻り医者を開業し、かたわら寺子屋を開きたくさんの子弟を教えた。西大室の井上家墓地に門人により明治二十七年四月に建てられた墓石がのこる。

文久三年（一八六三）四十四歳のころ、さらなる向上を期して京都へ、当時超一流の医師・国学者・神道家の権田直助の門をたたく、大きな影響を受けた。その縁で権田の師の平田篤胤とも交わり神道の真髓を極め、大和の古名社石上神宮の神官もつとめた。権田直助の片腕として彼の医学塾で教授として力量を発揮した。

明治四年五十四歳で郷里に戻り前橋藩校の国語の教諭となったが廃校で辞めた。また神職として一宮貫前神社にかかわった。明治十三年、六十一歳で故郷にかえり下大屋で再び医者を始め

めた。いそがしい合間をぬって薬学・本草学の研究をはじめ、国語教育に関心を注ぎ、小学校の国語教科書を検討し、文部省に出向き意見を述べたこともあった。

また、農事暦を新暦に合わせたり、外国語にも興味を示したことがのこされた資料からうかがえる。これらの資料は、大室神社や市立図書館に保管されている。この正香も明治三十三年十一月二十日、数え年八十二歳で没した。

*協力Ⅱ井上唯雄記 協力Ⅱ荒砥史談会
*城南公民館だより「城南」平成18年9月15日号掲載



井上正香の肖像

19 伏嶋家文書 飯土井町に残る古文書

飯土井町の伏嶋嘉一宅に文化四年（一八〇七）の古文書が残されている。差出人は名主嘉左衛門、組頭音衛門、弥治兵衛、勇右衛門、長百姓次郎兵衛の連名で代官宛のものであり、解釈文は左記のようである。

「村の鎮守稻荷大明神で毎年祭礼を行なっておりますが、近年は凶作続きであり、しかも地域の普請や出費などで休んでいたところ、昨年は陽気もよく若者たちも祭礼ができるよう鎮守へ願掛けなどしております。

永い間休んでいるうちに子供踊りの真似事など支度し、祭礼ができることを願っております。近年、村役人や御上様に御苦難をお掛けし、そのうえ村も衰退したので引き伸ばしするように申し付けております。また、当方においては、小屋原村の与左衛門殿を頼み、子供踊りの支度をはじめようと内々でお願い申し上げておりましたが、お取上げがなかったので厳しく差し止めてあります。

しかし、若者のこと故このことで農業を怠けるようになっては却って困ったこととなります。どうか御慈悲をもって祭礼子供踊りをお許し戴ければ村三役をはじめ一段と精を出し、御拝借金も御上納申し上げます。

そうして戴ければ、以後十カ年は祭礼についてのお願いは申し上げます。右のとおり仰せ付け下されば有難き仕合せに存じます。」

右の古文書は、凶作続きで村祭りが出来なかったことや、祭りの実施に対して代官の許可を得なければならなかったことなど、江戸時代における農村の祭礼に対する思いや御上との対応の一面が窺えるものである。

*内田憲治記（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成18年10月15日号掲載

20 石綿常盤彰徳墓碑（飯土井町）

石綿常盤は天保三年（一八三二）二月、飯土井村に生まれた。

幼名は全助、後に常磐と改めた。常磐は国学に大義ありと決意し、井上正香やその師で国学者・医師・神道家の権田直助に学んだ。さらに文久三年（一八六三）三十一歳の時、師の紹介により京の医師長上丹波頼徳に教えを受け医学を修得した。

万延元年（一八六〇）から明治六年（一八七三）まで自宅の塾で多くの子弟を指導する。明治二年六月に飯土井村と西大室村の俊傑たちと協心し、以前行なわれていた仏式葬を神祇式葬祭（神葬祭）に復活するため岩鼻県庁へ上請した。

明治四年正月、三十九歳の時平田鉄胤（篤胤の養子）の門をたたく、国学の大家篤胤の没後門人となり、その真髓を学び極めた。同年二月、飯土井村の鎮守産土稻荷神社は、元々上野国神明帳に記載されている井出上明神であると主張し、有志と社号復古を群馬県庁へ請願し、後に同社の司掌を命ぜられた。

明治四年、医学職務勲励賞誉金千円を賜り、明治十七年五月

内務省より内科医術開業免許が授与された。その後明治二十四年、五十九歳の時二男巖の分家において皇国古医道をもって生業とした。

彰徳墓碑は、明治三十九年（一九〇六）五月、七十五歳の生涯を終えた師に、多くの門弟たちの報恩の念により建立された。

*内田憲治記 協力〓荒砥史談会

*城南公民館日より「城南」平成18年11月15日号掲載



多くの弟子によって建立された石綿常盤の彰徳墓碑

21 新土塚城跡 ① (二之宮町)

二之宮町の南端、荒砥川と神沢川が合流する地点に新土塚城跡がある。城の規模は東西は約一五〇^{メートル}、南北は約二五〇^{メートル}である。西は荒砥川、北と南は五、六^{メートル}の比高があり、東側は約幅十五^{メートル}、深さ約四^{メートル}の掘り切りを要害とする。ある時、新土塚城と威徳寺との間で激しい戦闘があったと伝わっている。そして中島の島原が戦場となり、多くの戦死者が埋葬されたところを地獄塚という。

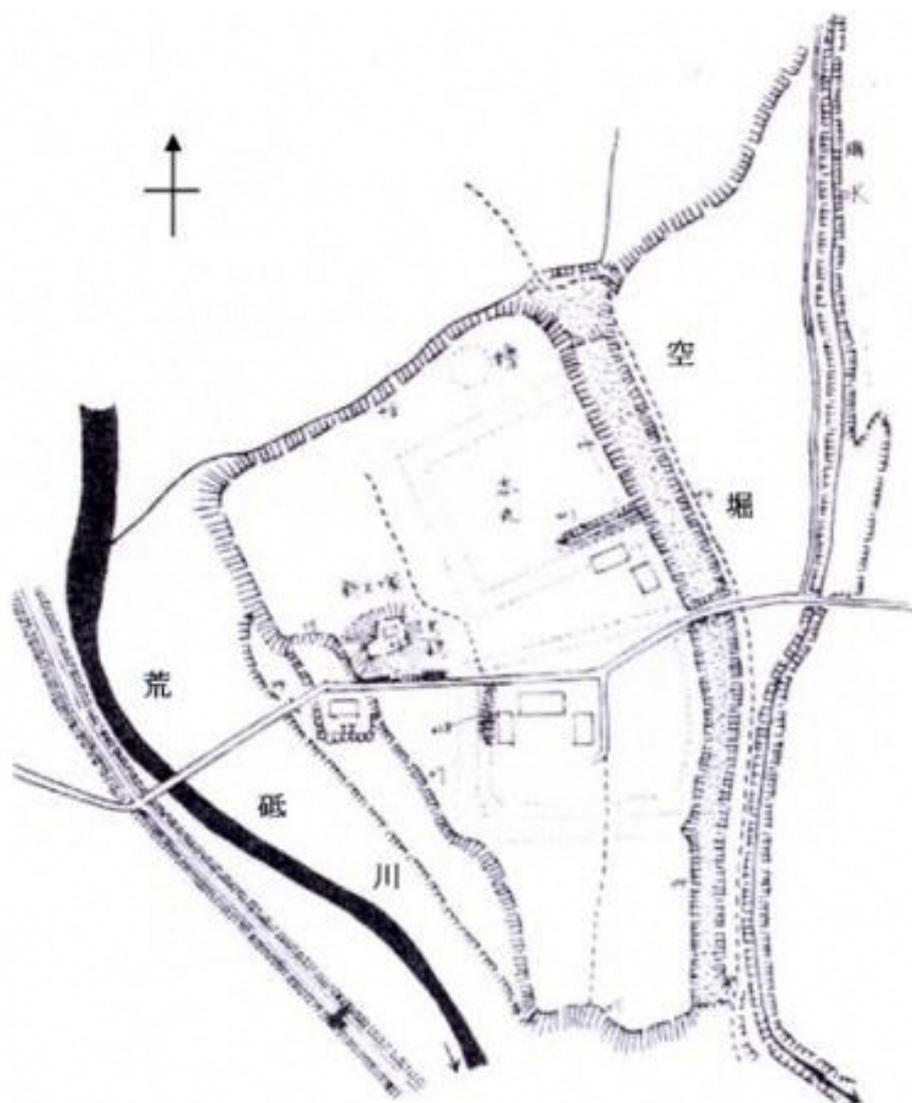
威徳寺跡は、二宮赤城神社から南西へ約三〇〇^{メートル}地点にあった。そこは以前、上武国道の発掘調査により館跡(宮下西館)が検出された。調査の結果、宮下西館の存続期間は十三世紀後半から十五世紀前半の間と考えられている。このような状況に観応かんおうの擾乱じょうらん(一二三五〇〜五二〇)をあて仮説をたててみたい。鎌倉幕府崩壊の後、新田義貞を破り覇権を得た足利尊氏であったが、弟直義との確執がついに戦闘へと発展した。直義方では関東守護の上杉憲顕と尊氏方の宇都宮氏綱は激しい戦闘となつ

た。宇都宮勢として参戦した大胡性秀・山上公秀・香林時秀らの一族郎党は笠懸野で打ち破られ一時撤退した。その後軍を立て直した宇都宮勢は、那波庄(伊勢崎南部)で待ち受けていた上杉勢の長尾景忠・桃井直常軍と決死の戦闘の末に撃破した。この時、山上勢はこぞって参戦し、戦功を挙げた山上治部介忠勝は、加恩により二宮の地を賜い、姓を山上から二宮に改めた。観応二年(一二三五一)のことである。推測の域を脱し得ないが、若しかすると宮下西館の主は、二宮治部介忠勝の可能性が考えられる。

*内田憲治記(荒砥史談会)
*城南公民館日より「城南」平成18年12月15日号掲載



新土塚城跡を北方より望む。左端は空堀、右は荒砥川の要害があり、中央のお椀を伏せたような部分は古墳で物見台としたようである。



新土塚城図（『群馬県古城壘址の研究』より転載）

22 新土塚城跡 ② (二之宮町)

越後へ敗走した上杉憲顕は、康安元年(一三六一)に勢力を盛り返し関東へ帰還した。宇都宮氏の上野守護は十二年で終焉を迎えた。それによって、宇都宮氏配下の所領地は上杉氏配下の所領にとって代わることになり、あちこちで小競り合いや戦闘が起こった。

このような時代背景に新土塚城や宮下西館は存在したものと考えられる。山上氏は秀郷流で上州八家に数えられた名門である。その一族が後見する二宮治部介忠勝と新土塚城主が戦をしたとは考え難い。しかも両者は直線で約二^キロという近距離にある。

しかし、宮下西館や新土塚城のいずれかに上杉方の勢力が攻め入り占拠したという仮説が成立すれば、宮下西館と新土塚城の戦闘は俄然、可能性を帯びてくる。もの凄く激しい戦闘であったと伝わっている。新土塚城主は袈裟切りにされ絶命、その怨念か荒砥川原には片葉の葦が生えるようになったという。

二宮赤城神社の神宮寺玉蔵院が大胡へ移され、代わりに宮下西館跡地へ威徳寺が建立された。威徳寺は幕末まで存続し、その後廃寺となったが、宮下西館の代名詞的な名称となった。そのため新土塚城と威徳寺との間に戦闘があったと伝承されたのである。

新土塚城主は真藤備前守と伝わっている。城跡には古墳があり当時は物見台として使われていたと思われる。真藤が新土になり、古墳があることから、新土塚と言われるようになったのであろう。

*内田憲治記(荒砥史談会)

*城南公民館だより「城南」平成19年1月15日号掲載

23 玉蔵院と威徳寺（二之宮町）

天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉の北条攻めで小田原城は落城した。それとともに関東入りした徳川家康に伴い、譜代の家臣牧野右馬允^{うまのすけ}康成は二万石で大胡へ入城した。康成は城の祈願寺として、二宮赤城神社の神宮寺である玉蔵院を城内へ移転した。康成は二宮に敬意を払い、移転した寺を二宮山玉蔵院と号した。代わりに大胡から威徳寺を赤城神社の南西約三〇〇メートルの所に建立した。

威徳寺が建立される約二〇〇年前、ここに宮下西館が存在していた。往古、威徳寺と新土塚城は激しい戦闘をしたと伝えられている（シリーズ「新土塚城跡」を参照）。ちなみに二宮赤城神社の神宮寺玉蔵院は南参道の西側で鳥居から五〇メートルの地点に存在していた。

大胡城を康成から受け継いだ二代城主忠成は、大阪冬・夏の陣に戦功を挙げた。元和二年（一六一六）五万石に加増され越後の長嶺城主になり、その城にも玉蔵院を建立した。その後、

間もなく六万石の長岡城主になった。

なお、忠成は大阪出陣の際、武運長久を祈願し二宮赤城神社へ絵馬二面を奉納した。牧野氏の大胡在城は二十六年間であった。越後転封により大胡城内に残された玉蔵院は、二度の火災に遭って荒廃し、明治四十二年玉蔵院末の金胎寺（大胡堀越町）に合寺し金蔵院観音寺となり現在に至る。

一方、二之宮の威徳寺は幕末まで存続の記録が見られるが、その後は荒廃の後に廃絶した。宮下西館跡も開発により痕跡も見られなくなり、今は威徳寺の名称だけが残っている。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成19年2月15日号掲載



宮下西館跡（『二之宮宮下遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
1994より転載）

24 桃中軒雲右衛門 ① (上増田町)

雲右衛門は浪曲界の中興の祖といわれ、明治・大正期に一世を風靡ふうびした。従来大道芸であった浪曲を格調高い劇場芸に仕立てあげた功労者である。

雲右衛門は、岡本峯吉といい明治五年(一八七三)茨城に生まれた。「祭文語り」さいもんで各地を旅回りしていた父繁吉に連れられ、四歳の時に縁あって上増田村の木村家の居候になった。峯吉は風呂焚きや農繁期になるとこの地域で盛んな田圃仕事の手伝いをした。また、父からは祭文語りを厳しく仕込まれ、十歳の時には芸名を吉川小繁と名乗った。小繁は暇さえあれば、家の西を流れる桃木川で腹から声を振り絞る発声練習を繰り返した。また練習の合間には魚を捕って夕餉の食卓を賑わしたという。

浪曲は享保(一七一六〜一七三五)頃、上野寛永寺の最下層の僧侶・願人坊主たちが唄いだしたと言われている。願人坊主は欠員ができないと寺に入ることが出来ず、仕方なく門付けして僅かな糧を得て生活していた。浪曲は、この門付けの節に各

地の音頭・瞽女こせの口説き・阿波浄瑠璃・浮かれ節・春駒節などが取り入れられた。大阪で流行ったことから浪花節といわれ、後にこれに対抗しリズムカルで歯切れの良い関東節が編み出された。

また浪曲独特の声は山伏たちの祭文の発生を真似たもので、「でろれん祭文」「ちよぼくれ・ちよんがれ節」等と呼ばれた。

雲右衛門が活躍した明治・大正を第一期黄金時代、昭和の東屋楽燕・東屋楽遊・鼈甲齋虎丸かめがしゅうこ・吉田奈良丸・木村重友・初代天中軒雲月・鈴木米若・広沢虎造らが第二期黄金時代を担った。

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館だより「城南」平成19年3月15日号掲載



雲右衛門が少年期に猛修行した桃木川原から
上増田町浅間神社の森を望む



大道芸であった浪曲を劇場芸に
仕立て上げた桃中軒雲右衛門は
浪曲界中興の祖といわれた



上増田町の浅間神社境内に
建立された顕彰碑

25 桃中軒雲右衛門②（上増田町）

明治二十一年、小繁は十六歳で上京し浪花亭駒吉の世話になり、母親の三味線で更に芸を磨いた。その後、結婚したが生活苦により妻は長男を連れ九州の実家へ帰ってしまった。間もなく小繁は父の芸名吉川繁吉を襲名し、先輩の三河屋梅車一座と浪曲興行をする。明治三十一年、真実は明らかでないが、梅車の妻お浜と駆け落ちをした。一説には仲間の讒言ざんげんが原因という。

浪曲は三味線が生命線とも言える。ひよつとすると三味線の名手お浜に惹かれていたのではないだろうか。関西へ向かう車中の沼津で、ふと弁当屋の「〇〇軒」の看板文字が目にとまった。思い起こせば少年時代、郷里の上増田での厳しい修行、とうとうと流れる桃木川、赤城嶺に湧き立つ白き雲、脳裏をよぎるは故郷の情景、この時繁吉は芸名を桃中軒雲右衛門と改名した。

大阪で寄席に出演していたが明治三十六年再び東京へ戻った。この頃右翼の大物で大陸浪人宮崎滔天とうてんと出会った。滔天は犬養

毅や大隈重信に知遇を受け、また孫文と親交があり中国革命運動を援助していた。滔天は雲右衛門の弟子になった時期もあった。この出会いで転機を得て、九州は博多へと向かった。

音曲が盛んなこの地で、筑前琵琶の節回しや民謡の末長節、また壮士の演説の演出も採り入れ、遂に雲右衛門節を完成させた。雲右衛門の芸は他の追隨を許さず、一息で二十秒も語る長いもので「三段流し」といわれた。総髪に黒紋付に袴、華麗な屏風に刺繍入りの豪華絢爛たる布で演台を飾った。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成19年4月15日号掲載

26 桃中軒雲右衛門 ③ (上増田町)

従来、浪曲は落語や講談より低俗で卑しい芸として、インテリ階層の人々には見向きもされなかった。しかし、雲右衛門の浪曲が爆発的な人気を博したのは、赤穂義士の銘々伝で武士道鼓吹の語りにあつた。それは日露戦争の勝利で、日本中が忠君愛国で沸き立つ世相に呼応するものだったからである。

有栖川宮別邸では妃殿下に『南部坂雪の別れ』などを口演した。このニュースはたちまち全国を駆けめぐった。東京の本郷座公演では一ヶ月満員札止めという空前の記録を作った。伊藤博文の座敷に度々招かれ口演した。博文は来客に「諸君らも元は下級武士、薩長土肥（薩摩・長州・土佐・肥後）の田舎者であり、長唄や浄瑠璃を聴かせても判らんだろう。だから浪花節を聴かせるのである。有難く聴け」と言ったそうである。大正元年には歌舞伎座での独演会も成功させた。

当時、引く手あまたの雲右衛門は、北はサハリン（樺太）南は台湾まで、主要都市はくまなく公演した。圧倒的な集客力に

明治四十二年、日本初のレコード吹込者となり、全国津々浦々に名声を高めたのである。しかし、大正五年に四十四歳の若さで大きな業績を残しつつ生涯を終えた。

昭和五十四年、少年時代を過ごした上増田の浅間神社境内に顕彰碑が建立された。その中心となったのは、上泉町在住の広沢虎声らで、葵わか葉や鹿島秀月などの浪曲公演の純益が顕彰碑建立にあてられた。

雲右衛門節は弟子の酒井雲一酒井雲坊（故村田英雄）、そして雲右衛門の養子となった東屋楽燕に受け継がれたが、浪曲の衰退とともに途絶えつつある。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成19年5月15日号掲載

27 大土御祖神碑（今井町）

この石碑は「土の神様」として信仰されてきた。大土御祖神碑は、今井神社参道の左側にあり、高さ一四呎、安山岩製で菱形の形状をしている。主体部の側面に弘化三丙午年（一八四六）二月吉日とあり、礎石に建立した講中三十人の刻銘がある。

大土とは、大地と同義であると考えられ、地神の信仰であると思われる。肥沃で健康な耕作土なくして、豊穰な稔りは約束されない。特に水田稲作の豊作への祈願、感謝が次第に土を神格化するようになった。地神とはもともと天神にたいする地神である。

地神は地母神信仰的な要素が多分にあり農民に篤く信仰された。地神は、冬は山の神となり、春とともに山から降りて田の神になるのが地神である。なお、地神は天神と異なり農民の神であるため社殿は持たない。

また、大地を切り拓いて耕地化した、祖先への感謝と畏敬の念はやがて祖先神として崇めるようになった。つまり、この碑

は大地への祈願や感謝と、水田開拓した祖先への報恩感謝のために建立された。なお、大土御祖神という刻銘の碑は、周辺地域でも他に類例が見られず稀有なものである。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成19年6月15日号掲載



神社参道の大土御祖神碑

28 今井神社古墳（今井町）

今井神社古墳は、荒砥川の左岸にあり、全長七十一メートル、高さ七・五メートルの規模を持つ竪穴式の埋葬主体を有する前方後円墳である。かつて墳丘部には葺石^{ふきいし}があり、円筒埴輪を廻らしていた。埋葬主体部は、凝灰岩^{ぎようかいがんせい}製の組み合せ式石棺で、縄掛突起をもつ蓋石^{ふた}が残っている。鉄剣一、鉄刀三振りの出土が伝えられている。

明治二十年代に、家形埴輪、人物埴輪、土器数点が出土し、大正末期に石棺と直刀一振りが発見された。昭和十年に行われた、県下一斉の古墳分布調査（『上毛古墳綜覧』）では、今井神社古墳の周囲に二十五基の古墳があった。なかでも本古墳は最も大きく、この周辺一帯を治めた権力者を埋葬した施設であろう。昭和五十六年の圃場整備事業に伴う調査では、周辺の古墳はわずかに三基しか残っていなかった。

なお、石棺の内面が赤色顔料で塗られているのは悪霊除けのためで、赤の持つ視覚的な威力が悪霊を寄せ付けなくとする考え方である。このような死者に対する風習は現在も残っている。

今井神社古墳は、荒砥地区でも古い形式の前方後円墳で、築造は五世紀後半ごろと考えられており、昭和五十六年に市指定史跡になった。前方部に観音堂宇、後円部に神社が祀られている。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成19年7月15日号掲載



今井神社古墳
（社殿の部分が後円部、右側が前方部）

29 薬師堂の阿弥陀石殿（荒子町）

阿弥陀石殿は、総高一・二二セシを測り、正面に向拝窓がある。右脇に縦長の窓があるが中央部は欠けている。屋蓋は茅葺風の寄棟で、軒は二軒繁極様式が施されている。石殿の正面右に二行の文字が刻まれ、「教法大徳・教本□□」と読める。左側も二行で「上野国勢多郡大室庄田太□□□・文明十二年庚子（一四八〇）称月八日」と記されているが、□部分は判読不明である。なお、称月とは三月の別称である。

石殿内に祀られている石製阿弥陀如来坐像は、頭部は如来を表す肉髻・螺髪（にっけい らほつ）でふくよかな面相をしている。豊満で堂々たる体軀（じょうほんじょうしやういん）をしており、胸飾りをつけている。印相は弥陀定印（みだじよいん）の上品上生印を結んでいる。光背は頭光という円形で日輪を表現した陰刻が見られる。

薬師堂の東方は下境遺跡があり、発掘調査の際に、薬師堂を取り囲む状態で堀跡が発見され、室町時代にすでに創建された寺院であることが検証されている。

なお石殿に「大室庄田太…」とあるのは「大室庄多田在住人」とも読める。中世は大室・多田・下触・舞台・下大屋・飯土井・二之宮は大室庄七郷の領内であった。寺は明治末期に火災に遭い、その後小宇を建立したという。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成19年8月15日号掲載



中世の寺院跡に祀られている
阿弥陀如来石殿

30 荒子塘碑①（荒子町）

塘碑の内容は次のようである。

「上州勢多郡荒子村の館林藩領内に塘が三つある。南の堤には小島があり弁財天の祠がある。西北は松が密集し観音像の祠がある。南は桑や麻・麦の列が並び、川に土橋が架かり、松林の中には諏訪社がある。東に松の岡が連なり、その北には小さな寺院に薬師像を祀る。

産泰祠の丘には古松が繋り、近くにはうるこの様に家が並び、酒屋の旗は客を招く。老杉ある所に稻荷の祠があり、芋茸の家が点々と並ぶ。子供は犬と遊び、農夫は馬を叱咤し飴屋の笛が響く。

北には秀麗なる赤城山が雪を頂き、その雲湧く様は絵を見るようである。肥えた田や沃地多く繭を産し様々な産物を生産する。春分の頃には蝶や蜂も群れ、まるで嵐山・吉野の小景を見るようである。

万延二年（一八六一年は文久元年）辛酉の春、一旭仙飯島翁

は八十八歳で、細字楷書を書くに眼鏡を使わず。門人、諸友たちは二月二十七日に長寿を祝った。翁は、村人と文政壬午年（一八二二）に桜を植えた。あゝ四十余年の久しきに樹は一抱えにもなり、春風吹く様は錦絵のようで塘に湛えられた水とともに願わくは悠久に伝えん。」

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成19年9月15日号掲載



岡永松陽の撰文・揮毫による荒子塘碑は沼の東南隅に建っている

31 荒子塘碑②（荒子町）

前号の塘碑訳文は紙面の都合上、かなり省略してある。撰文および揮毫は、久留米藩の侍講岡永松陽である。荒口村に生まれた阿部耕雲は若くして江戸へ出て松陽に学び漢籍を修めた。松陽は耕雲の師匠である。

塘碑は沼の塘の完成記念碑ではない。帰郷した耕雲を松陽が訪れ、荒子沼周辺を散策した時のことが記されている。風物描写は臨場感に富んでおり、当時の景観が目の当たりに浮かぶようである。また、新宿集落に一旭仙飯島翁という書画風流人がいたこと、翁の米寿の祝のこと、そして翁の発案で柳・桜植樹に至るいきさつにまで及んでいる。

なお、碑の建立年月日は刻まれていないが、碑文から勘案すれば、建立は文久三年（一八六三）から明治元年（一八六八）の間であることが限定される。松陽は耕雲宅の食客となり、明治二年に没し観音寺に埋葬された。後に合併した二之宮の無量寿寺に改葬された。

荒子沼は当時、周辺屈指の花見スポットであった。『荒子塘碑』は、荒口の文人阿部米太郎による書き下し文がある。しかし、それも今は難解であり、塘碑の存在のため、敢えてここに訳文を記した次第である。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成19年10月15日号掲載



往時の桜名所も今は5本になった荒子沼。手前は小島の名残り弁財天石祠

「あづま道」は、古代の官道「東山道」であることが、従来の研究では定説化されていた。入山峠から群馬へ入り、坂本・松井田・安中・高崎へと行路をとる。前橋に至り小相木を通過、六供・天川原・天川大島・上大島・上長磯・女屋・小島田へ至る。筑井・今井・二之宮・飯土井から石山丘陵を南へ迂回し、下触・五目牛・上植木・田部井・国定・藪塚本町・太田から足利へ至る、とされていた。

しかし、近年の発掘調査の結果、従来「あづま道」と呼称されていた道とは、全く別の地点に新たな遺構が発見された。幅九〜十二メートル、両端に側溝を施設する大規模な道路状遺構である。その地点は、高崎市上滝・玉村町上福島・樋越・伊勢崎上之宮・田中・葦塚・境町牛堀・新田町大根・市野井・上根でそれらの地点を結ぶとほぼ一直線状となる。

「あづま道」として現存する道と、新たに発見された道路状遺構は、前橋市内で南北に約六キロメートルを隔てて東西に並走する。た

だし、これほど大規模な幅員と側溝まで敷設した道路なのに、現在まで道路として残っていないのはどういうことであろうか。また、この道路状遺構が官道「東山道」であれば、その道路にまつわる伝承や道路に関する地名を残していてもいい筈である。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成19年11月15日号掲載



今井町の前原地区を通過する「あづま道」

城南地区内の「あづま道」の現況を詳細に見ると、小島田十字路の北から斜めに筑井町八日市の台地南端を経て、水田地帯を越えて荒砥川の東橋に至る。この間の水田地帯は圃場整備事業により現況を留めていない。東橋を渡ると、あづま道の北を道上・南を道下、と言い古道にちなんだ地名を残している。今井神社の北辺から今井町の集落を東へ向かうと山中へ出る。

二之宮町へ入り、城南支所の東側で国道五十号線と交差する間は全く残存していない。国道と交差後、約二十メートルは国道と並走して現況を留めている。そこから東へ向かう約四百メートルは全く面影を留めていない。再び国道五十号線と交差し南側へ渡り、二宮赤城神社の北を通過する。東へ向かうと集落が途切れる間は明確に残っている。そこから東の水田地帯は圃場整備事業でやや現況を失っている。集落に入り（県）伊勢崎・大胡線を横切り集落が途切れる間は良好な状況で残存している。

さらに東進すると水田地帯になり飯土井町へ入る。この間の

水田地帯も圃場整備事業により消失した。上飯土井の集落は往時の名残が見られ、やがて飯土井沼の北辺に至る。それ以後、神沢川に至る間は圃場整備事業と工業団地造成によりあづま道は完全に消滅している。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成19年12月15日号掲載



二之宮町の宮西から宮後に至る「あづま道」

34 あづま道 ③

「東山道」は、古代の律令制により約千三百年前に地方行政区画として、五畿（山城・大和・摂津・河内・和泉の五方国）七道（東山道・東海道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西南道）の中に設置・整備された。

「あづま道」の周辺には奥州へ落ち延びた義経にまつわる伝承が数多く残っている。

◇利根川を渡り六人の供を連れた、または残したという六供のこと◇愛馬磨墨するすみを西善へ埋葬したこと◇長磯ながいそで休息した時の「義経の腰掛石」は女屋の桃木川観音橋の袂たもとにある◇義経を不憫に思った増田の民人は十日夜の餅もちを九日夜に振舞ったこと◇荒砥川越えに因む「声殿こゑどの・越殿こしどの・越渡こしわた」という地名のこと◇二宮赤城神社へ道中の無事を祈願したこと◇赤堀には「牛伏うしふせ・五目牛ごめうし・酒盛さかもり・掛矢清水かけやしみず・書上かきあげ」などいずれも義経に係わる伝承地名が残っている。

秘密裏に道中する者にとっては、表大道より裏脇道の方が安

全だったのかも知れない。「あづま道（東街道）」は「東山道」の脇往還または直路すくじだったのであろう。

千数百余年にわたり幾多の人が、様々な思いで通行したであろう歴史の道をたどると感慨深い思いである。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成20年1月15日号掲載



飯土井町の上組を通過する「あづま道」

35 北宿の二十二夜供養塔（西大室町）

月の出るのを待ち、月を祀るのが月待信仰で、二十日以降の夜の月を「臥待ふしまちの月」という。月読尊つきよみのみことは伊邪那岐命いざなのみことの右目から生まれ、夜の世界を治め、月の神とされた。後に仏教と結びつき習合信仰されるようになった。月待は女性の信仰で安産や子育てを祈願し、講を持って供物を供え飲食を共にする。

二十二夜塔の総高は、一二三チンの如意輪にょいりん観音の丸彫り像で表現されている。右立膝に右肘を置き、頬に手を当てている。これはいかにしたら民衆の苦しみを取り去り、利益を与えることができるのか、という思案のポーズをとっているのである。

八面六臂はちめんろっぴとは、一人で数人分の手腕を發揮するたとえであるが、この如意輪観音も六臂（腕）であり、右中段の手は輪宝、下段は宝珠、左中段の手は蓮華、下段は数珠、もうひとつの手は左膝に乗せている。宝珠は金銀財宝や衣服飲食を出し、輪宝は思いのままに前進し衆生の迷いを破るとされる。

六臂を持つようになったのは平安時代以降である。中台の正

面に「二十二夜供養」、左側面に「明和六年己丑年」（一七六九）と刻字されている。往時の月待信仰の篤さを物語っている。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成20年2月15日号掲載



民衆の苦難を取り去るべく思案する如意輪観音像で輪王坐をとる

36 下宿の念仏塔（東大室町）

石山十字路から北へ進むと、道路は緩やかに曲がり、間もなく左側の道路と鋭角に交差する。そこに幅約一四五センチの安山岩を台石として、総高は一七六センチ、幅三十五センチ、奥行三十七センチの念仏塔が立っている。

念仏塔は安山岩製で、中台に「念仏塔」と刻まれ、上の蓮華座は横に張り出すように造られている。塔身には、地藏菩薩が半肉彫りされており、左手に宝珠、右手に錫杖を持っている。右側面に「願以功德普及於一切（願わくは功德をもつて普あまねく一切に於いて及ぼし）」、「我與衆生皆共成仏道（我と衆生と皆ともに仏道に成ぜん）」、左側面に「明和六己歳つちのと（一七六九）十一月吉日」と刻まれている。

浄土教が阿弥陀如来の信仰を広め、「南無阿弥陀仏」を唱えることによって極楽往生ができることとされた。人々は集って念仏講を持ち、極楽往生と現世の二世安樂を祈念して念仏塔を造立するようになった。

浄土教は法然によって説かれ、その平易さと平安時代後期の末法思想とが相俟って、盛んに信仰されるようになった。中台側面には、県道深津・伊勢崎線に面して「いせさきみち」、反対側には「二ノ宮道」と刻まれ、往時の道しるべの役割も果たしていたようである。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成20年3月15日号掲載



左手に宝珠を戴き右手に錫杖を持つ地藏菩薩

37 八坂用水と白井沼 ①（二之宮町）

伊勢崎藩は、水田稲作の水不足が慢性的な状況であった。そこで水量豊かな桃木川に着目し、郡奉行の小畠武堯と配下の阿久津藤右衛門、鈴得六右衛門が協力し用水堀工事の策定をした。取水口は筑井村の桃木川で、廃堀状態の増田川用水を改修し、筑井村・増田村、通過地点の二ノ宮村関係者の了解を得て計画されたのである。二代藩主洒井忠告の時のことである。

土地の高低測量は、夜間に線香の火で行い、三年の歳月を要した。堀削工事は、宝永二年（一七〇五）に着手し、荒砥川や神沢川は、木樋で渡河し、落水地点の粕川までを一カ月で竣工した。これにより八坂村、波志江村、安堀村、大田村、宮下村、伊勢崎町、今泉村、茂呂村の約四〇三町（約四〇〇町）の潤沢な水田灌溉が可能となった。

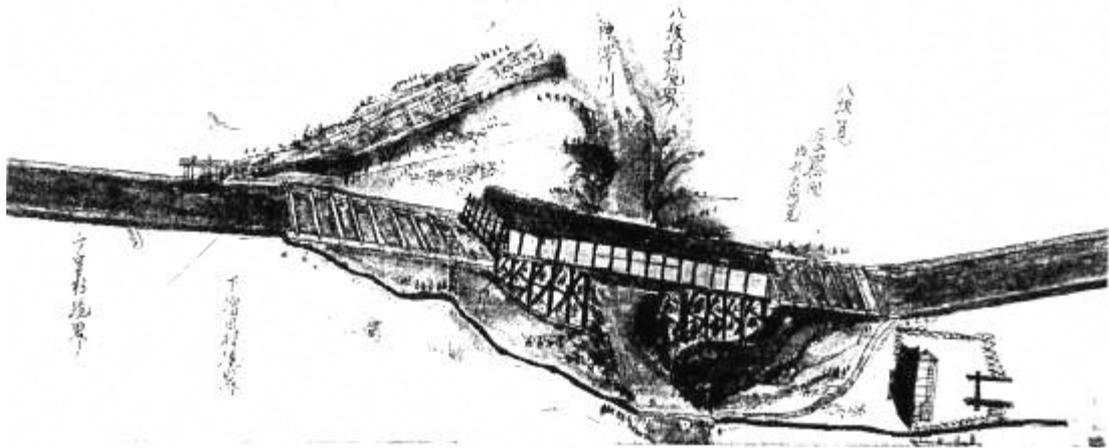
大正十一年（一九二二）、粕川左岸側の采女村、境町、剛志村、世良田村、植蓮村は旱魃により大被害を被った。これを打開するため翌年、佐波・新田用水耕地整理組合を設立し、広瀬桃木

両堰水利組合と八坂堰水利組合に用水供給の申し入れをして契約が成立した。

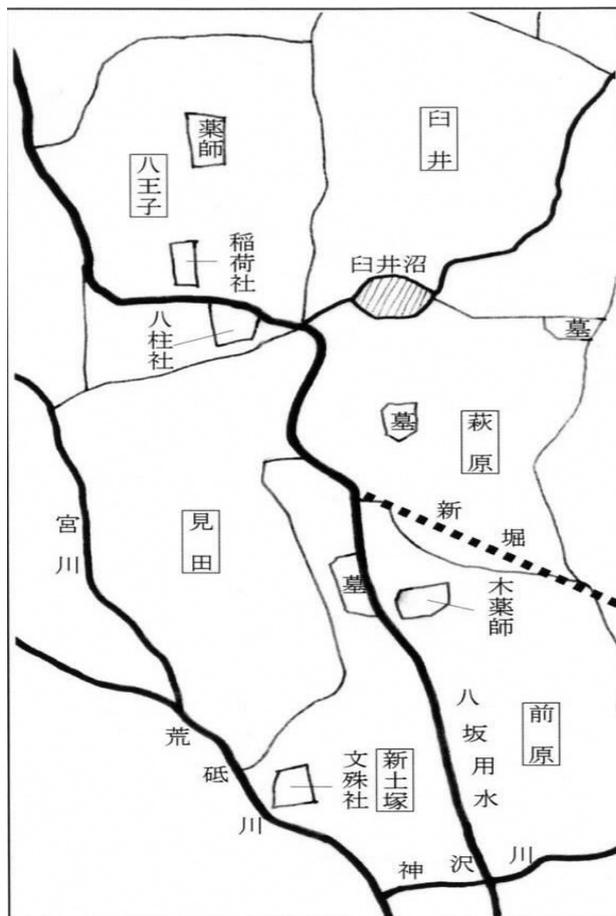
華蔵寺橋下で八坂用水をサイフォンにより粕川を横断し、殖蓮・采女地区の水田へ供給する計画で、工事は昭和二年（一九二七）に完成した。粕川と交差する地点より上流が八坂用水で、それより下流は佐波・新田用水となる。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成20年4月15日号掲載



八坂用水は神沢川との交差を木製の樋で渡河した右下に御小屋の様子が伺える



八坂用水と白井沼周辺〈明治九年の二之宮図面〉

38 八坂用水と臼井沼 ② (二之宮町)

八坂用水は、佐波・新田用水の工事に伴い、二之宮南部地点で新井地区へと流路を変更した。現在、新堀と呼ばれている部分である。それにより新土塚先の八坂樋は、昭和二年に二二二年間の役割を終えた。神澤川上流約六〇〇[㌢]地点にコンクリート樋が作られ、その後サイフォンになり、現在またコンクリート樋が設置されている。

二之宮南部にはかつて臼井沼という灌漑用の沼が存在した。水源は下大屋の字諏訪地内の湧水と泉沢の村主の泉すぐるからの流水である。県道伊勢崎・大胡線の東側を南流し、上武国道と交差する南で西側へ流路をとる。二之宮の青柳地区から河原田地区を経て臼井沼へ至る。沼の規模は一反五畝余(約一五三九平方[㌢])である。臼井沼は、旧宮川左岸で八王子集落の南から、新土塚に至る見田地区の約十二町(約十一・九[㌢])の水田を潤していた。

見田地区の水田は、八坂用水から取水されるようになり、臼

井沼は役割を終えることになった。かつて沼の側に内田長太郎さんの家があり「沼長ぬまちょうやん家」、また沼の落水口の側の家は「出尻でじりん家」と呼ばれていた。現在、臼井沼の存在は皆無となった。なお、旧八坂樋跡の対岸にオコヤという呼称が残っている。往時、伊勢崎藩の樋監視役人が駐留した御小屋おこやの名残である。

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館だより「城南」平成20年5月15日号掲載

39 小峰佐五右衛門（東・西大室町）

赤城南麓一帯はとりわけ水利に乏しく、稲作経営に困窮を来たすことが多かった。それによる水騒動はしばしば起こり、佐五右衛門則次は能満、乾谷、横俵、五料など溜池の堤改修工事に私費を投じ実践した。また苗ヶ島に神沢川の四分六分堰を設けた。四分は荒砥川、六分は神沢川へ流し大室地区の水源確保に貢献した。

佐五右衛門の父は、寛永二十年（一六四三）武州から移り住み一伝流を皆伝後、さらに研鑽し自心流を編み出した剣の達人であった。佐五右衛門は、剣士の父とは異なり医を生業とした。しかし、その傍ら水飢饉に苦しむ農民の姿を見るに見兼ね、大室地区の水田灌漑に力を尽くした。江戸時代前期後半頃のことである。

時の経過により佐五右衛門の偉業も次第に忘れ去られつつあった。しかし、東大室で行われた中沢右吾氏の歴史講座がきっかけとなり偉大な恩に報いたい、との声が湧き上がった。約

三百年の時を経て、昭和五十八年に乾谷沼・五料沼水下一同により、『報恩の碑』が五料沼の畔に建立された。その際、父母の墓石に隣接して佐五右衛門の墓標も建てられた。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成20年6月15日号掲載



佐五右衛門の業績を後世に伝えるための報恩の碑

40 観昌寺の山門（西大室町）

本柱四本と控柱二本にそれぞれ桁けたを載せ、梁はりと貫ぬきで組み込んでいる。柱はいずれも角柱で、本柱の桁には唐草文が彫刻され屋根は銅版葺きである。表の本柱が棟束側むなづかにずれている構造的な特徴が見られる。従って、屋根は前方へ大きく張り出す形状を示す。このような様式は桃山時代から始まるもので、元来は城門の一種で薬医門やくいもんといい、矢喰やくいが語源とも言われている。

桁行二十尺（約六¹/₂）、梁行十尺（約三¹/₂）を測り、三間一戸さんげんいっこ型式の山門であるが建立年代は明らかではない。元来、参道・山門・本堂は、一直線上にあるのが一般的な型式である。山門は本堂の再建に伴い移築された。現在の山門の東約十¹/₂地点に南北の古い参道が残っており、以前はここに建っていたのであろう。山門は、参道を経て寺の境内に入るときに必ずくぐる門である。門をくぐることで解脱げだつできることを意味する。空・無相・無作の三つに例えられ、三門さんもんという。また、山での過酷な修行

の後に解脱したことに因み、寺の号としたことから山門というようになった。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成20年7月15日号掲載



くぐることで解脱されるという山門

41 普蔵寺の供養塔（東大室町）

塔身は一〇五・五センチで、上位の幅六十一・五センチ、下位の幅六十五・五センチで安山岩製である。縁をとり内面を隅丸長方形に薄く彫りこみ、上位に（阿弥陀如来―キリーク）、（観音菩薩―サ）、（勢至菩薩―サク）が彫られていたが剥落が進み判読不明である。下面に「為六凡四聖」、ろくぼんしせい「康正元乙亥（一四五五）十一」と刻まれている。仏教でいう十界とは、六凡（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天）の世界と、より上位にある仏界、菩薩界、縁覚界、声聞界の聖なる世界の四聖を言う。

普蔵寺は東西二十一間（約三十七・八メートル）、南北二十七間（約四十八・六メートル）の寺域があり、往時はかなりの名刹だったようである。多田の北辺にあったが天正年間（一五七三―一五九一）に兵火に遭って焼失した。再建されたが江戸時代後期に廃寺になり、供養塔はその後堀の橋に転用されていた。東大室の老人クラブによって発見され、昭和二十六年にその重要性から最善寺へ移し再建された。

輝石安山岩製であり、異形の供養塔で室町時代の地域信仰の一端を表している。一時期は橋に転用されていたことにより種子・銘文は摩滅・剥落が著しい。市の重要文化財に指定されている。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成20年8月15日号掲載



六凡四聖（十界）供養のための板碑

42 今井城跡①（今井町）

荒砥川にかかる御蔵橋の上流に、曲輪橋があり右岸に今井城跡がある。この橋は平成九年三月に架け替えられ曲輪橋となったが、それ以前は今井荒砥橋という名称であった。本丸跡と思われる郭（曲輪）は南北七十^{メートル}、東西六十^{メートル}の規模が認められていたが、周辺は宅地開発の埋土などにより変貌している。この城跡は古くは頼居城（寄居城）^{よりいじょう}と言われていた。

本丸跡の西側は弧状となり南端に寄居山と呼ばれる高さ約二^{メートル}の櫓台があったが今はその痕跡はない。「寄居」とは、中世の城下町が、城主の衰滅のために農村^{こくち}に変わって集落になった状態を表す。櫓台の北側に食い違いの虎口^{こぐち}があったという。外郭は北方の新沼（現存しない）まで囲み、本丸の西側には二・五^{メートル}程の腰郭^{こしきくわ}を備えていた。

今井城の築城年代は明らかではないが大胡城の支城であったといわれている。大胡氏は鎌倉幕府の御家人として活躍したが、永祿年間末に大胡を去り牛込の地へ移り、牛込を名乗った。今

井城は斉藤氏が在城したと伝えられているが、城の存続時期など詳細については明らかではない。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成20年9月15日号掲載



北部から望む今井城の北郭

43 今井城跡②（今井町）

今井の地名は、木曾次郎といわれた源義仲の四天王の一人、今井四郎兼平の末裔がこの地に住んだことによるといいう伝承がある。今井氏は後に北橋村の箱田に移ったという。

明治九年（一八七六）の小字図によれば、新沼に南接して北曲輪、そして荒砥川東岸面には中曲輪という小字が存在していた。なお、昭和三十五年（一九六〇）の地籍図には、現在の河道部分より東側に湾曲・蛇行した荒砥川の痕跡が見られる。

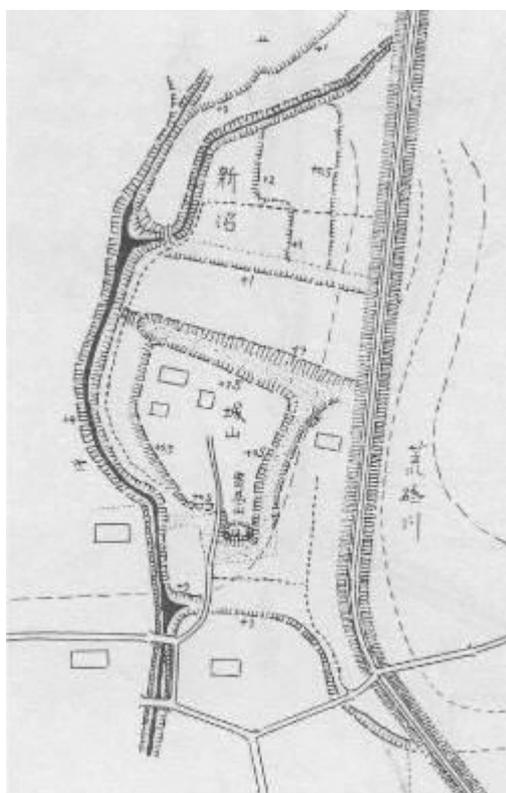
このことにより、この付近までが城域であったことが考えられることから、当初の規模は南北約二五〇メートル、東西約一五〇メートルの規模が計測できる。今井城は荒砥川を自然要害とし、西側は小河川を掘削し荒砥川からの引水によって防御したものであるろう。

昭和二十二年のカスリン台風や、翌年のアイオン台風により荒砥川は大水害が発生し、二十四年から河川改修による護岸工事が実施されるようになった。これによって今井城の東部分は

失われることになり、城郭としての景観は見られなくなった。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成20年10月15日号掲載



今井城跡図（「群馬県古城壘址の研究」より）

44 二宮赤城神社の絵馬 ①（二之宮町）

牧野氏は三河（愛知県）牛久保の土豪から身を起こし、永禄九年（一五六六）徳川氏に仕えた。天正十八年（一五九〇）、家康は関東入りにあたり応仁の乱以降およそ百年続いた戦乱の地上に譜代の重臣を配し備えた。箕輪城に徳川四天王井伊直政、関東の華といわれた厩橋城へ平岩親吉、館林城へ四天王榊原康政、そして大胡城へ二万石で牧野康成を入封させた。

慶長九年（一六〇四）、父康成から家督を譲られた忠成は、元和元年（一六一五）大坂夏の陣参戦に際し二宮赤城神社へ戦勝を祈願した。戦功を挙げ凱旋した忠成は絵馬二面を奉納した。論功行賞により翌年、五万石に加増され越後長嶺へ、その後さらに一万石加増され長岡へ転封になり、新田開発により七万四千石の領主となった。

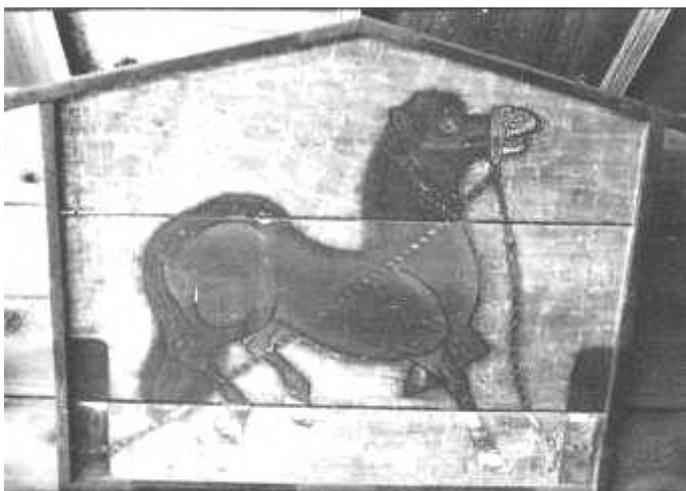
絵馬一对二面のうち一面は、栗毛馬が右へ向き、左前足を蹴上げる勇壮な図で、もう一面は左から右を振りかえり、左足を蹴上げる葦毛馬あしげの図で、ともに背面には金箔が施されている。

この馬が夜な夜な暴れまわるので二本の手綱で繋ぎ止めた、という逸話が残るほど勇猛な姿である。

昭和五十年市重要文化財に指定されている。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成20年11月15日号掲載



栗毛の荒馬が描かれた絵馬（縦 119cm,横 137cm）

45 二宮赤城神社の絵馬②（二之宮町）

慶長六年（一六〇一）平岩親吉ちかよしに代わり洒井重忠が三万三千で厩橋城まやばしへ入封した。元和二年（一六一六）大胡城の牧野忠成が越後長嶺へ転封になり、大胡領は厩橋領に編入された。その翌年、家督を譲られた二代忠世ただよは、十二万二千五百石を領するようになり幕府老中の要職に就いた。一対二面の絵馬はこの頃の奉納と推察される。

四代忠清は幕府の大老となり、江戸城大手門外堀端の下馬札前に屋敷があつたことから下馬將軍と評され権勢を誇った。しかし、四代將軍家綱の世継問題で忠清は水戸光圀や堀田正俊と対立し失脚した。厩橋から前橋への改称は忠清治世の慶安時代の時に行われた。

忠清の失脚によりその子忠挙ただたかは幕府の要職に就けなかつたが、藩士の綱紀肅正や武道や学問をすすめ藩校を開いた。また城下町を整備し市を開き、災害対策に備え領民に慕われる名君となり、後に幕府老中首座の要職に就いた。洒井氏は九代忠恭ただすみの時

姫路へ転封になった。

絵馬は鞍をつけた栗毛の馬が二人の男に手綱をとられた図で、もう一面は同じような図で葦毛馬あしげである。背面には金箔が施されている。昭和五十年に市重要文化財に指定された。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成20年12月15日号掲載



二人の男に手綱を取られる葦毛の絵馬
（縦122cm,横142cm）

46 めいがん様①（西大室町）

北宿の北辺に「めいがん様」と呼ばれる石造物がある。「めいがん様」に願をかけ、水鉢の水をつけると眼の病が治りお礼詣りにいく、という信仰が一時代前までであった。

室町幕府八代將軍足利義政のけいし継嗣争いと、しば斯波・畠山両管領家の家督争いに端を發し、やがて応仁の乱といわれる十一年の長期にわたる戦乱となった。京の都は諸大名を巻き込み戦乱は益々激しさを増し、足利幕府の權威は全く失墜した。その余波は地方にも及び、世は麻のごとく乱れ下克上の戦国時代へと突入していった。

白井（旧子持村）の長尾かげはる景春の祖父かげなか景仲と父かげのぶ景信は、越後から進出した関東管領上杉家の家務職かむしきとなり、管領を補佐し家臣団を統括した。それにより長尾氏は、同族で中心的な存在である惣社（総社）長尾氏を凌ぐ勢力となった。景春は父亡き後、上杉家の家務職は当然自分にまわってくるとの思惑を抱いていた。しかし、その思いは叶わず家宰職は惣社の長尾なが忠景おただかげが就く

ことになり、上杉家に対する不信感は一気に膨らんでいった。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成21年1月15日号掲載



目の病を治すといわれた「めいがん様」

47 めいがん様② (西大室町)

二代に亘り山内上杉家の家務職に就いた白井長尾氏であったが、景春は祖父や父の家務職を継ぐことができず、父の弟で惣社(総社)長尾忠景にその座を奪われてしまった。主家上杉氏に対する不満は頂点に達し、文明八年(一四七六)叛乱を起こし、関東管領上杉顕定を襲ったが追い落とすことは出来なかった。

激しい戦乱は上野国内から武蔵国にまで及び、扇谷上杉の家務職太田資長(道灌)と組もうとしたが逆に攻められた。上杉勢に押し戻され形勢不利な状況から柏原城(吾妻東村)へ退いた。その後、上杉勢の撤退により一旦は白井城へ帰還した。景春はある時仏門に帰依し伊玄と号した。景春の転戦は述べ三十数年に及んだが、再び追われ永正十一年(一五二四)越後で客死した。

孤軍奮闘した景春は、ついに戦国大名として大成することなく野望は潰えた。その後も上野国からは強大な戦国大名は出現

することはなく、上杉・武田・後北条氏(小田原北条氏)らの戦乱の地でしかなかった。

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館日より「城南」平成21年2月15日号掲載



長尾景春の供養塔

48 めいがん様 ③ (西大室町)

長尾景春の^{かげはる}主家山内上杉^{やまのうち}顕定^{あきただ}への謀反^{むほん}により嫡子景英は白井城を失い大室城へ^{いんせい}隠棲した。

「めいがん様」は五輪塔で、地輪に「明巖宗哲^{めいがんそうてつぜんじょうもん}禪定門の為 石塔一基造立奉る 時于永正蒼^{そう}雫^{しづく}□□極月日」と刻字されている。蒼が永正年代末を表すものであれば十七年(一五二〇)であろうか、とすれば干支(えと)は庚辰^{かのえたつ}であるが辰は不明瞭である。雫は年の異体字で、極月は十二月である。

景春は永正十一年(一五一四)に没したが、主家に謀反していたことにより数年後に景英が隠棲地の大室に父の供養塔を建てたのであろう。後年、古河公方^{くぼう}(足利成氏)の仲介により和睦し、景英は再び上杉氏に仕え白井城へ帰還し大永七年(一五二七)に没した。

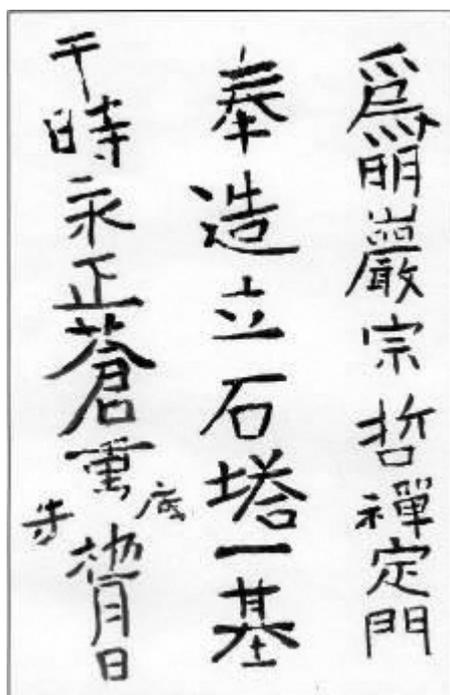
従来、「めいがん様」は景英の墓とされてきた。しかし、父景春の供養塔であることが判明した。なお、景春は入道し伊玄と号したので禪定門(在家の仏教者)の戒名が与えられたのであ

ろう。

「めいがん様」は戒名の明巖^{めいがん}であり、明(目)、巖(眼)の読み音から目の神様に転化したものと考えられる。

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館日より「城南」平成21年3月15日号掲載



めいがん様の地輪に刻まれた銘文

49 長尾氏の系譜 (西大室町)

大室城に関わる長尾氏の系譜について述べてみたい。鎌倉幕府は三代で源氏流が途絶え次第に求心力が衰えた。執権北条氏はそれを回復するため建長四年(一二五二)、六代将軍として後嵯峨天皇の皇子宗尊親王^{むなたか}を迎えた。上杉憲房^{のりふさ}はそれに随行し幕府の御家人となった。そして長尾景為^{かげため}は上杉氏に従い同じく鎌倉入りした。

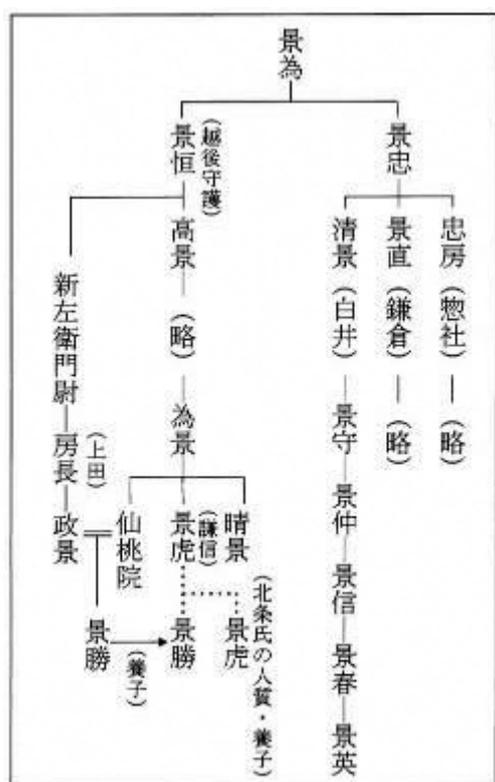
上杉氏は山内・宅間・犬懸・扇谷に分家し、平井城の山内上杉氏が関東管領となった。一方、長尾景忠の子は惣社・鎌倉・白井に分家した。惣社長尾氏が上野国守護代や山内上杉家の家務職を務めて中心的な存在であったが、やがて白井長尾氏が勢力を拡大し家務職を務めるようになった。しかし、景春の代は家務職に就くことが出来ず、それが原因で謀反したことは前三回ですでに述べた。

NHKの大河ドラマ『天地人』に登場する長尾氏は、景忠の弟景恒が守護職として越後へ赴き基盤を築いた。後裔(こうえい)

の景虎(謙信)は、北条氏康に追われた上杉憲政に請われ名跡を継ぐが、妻子がなく姉の子景勝を養子にした。しかし、謙信には北条氏康の四男が人質としており景虎の名を与えていた。その妻は景勝の妹という複雑な関係で謙信亡き後は当然のごとく家督争いで「御館の乱」^{おたてらん}が勃発した。

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館だより「城南」平成21年4月15日号掲載



長尾氏の系図

50 耕読堂之碑 ① (荒口町)

荒口町に生まれた阿部耕雲(耕太郎)は、弱冠にして学問を志し江戸で久留米藩の侍講岡永松陽に漢籍を学んだ。また詩文を藤森天山、鷺津綺堂に、さらに幕府学問所昌平黌で林大學頭に師事した。

昨年のNHK大河ドラマ『篤姫』は大変話題になったが、幕府は難局を打開するため公武合体を画策した。それは皇女和宮を十四代将軍家茂に降嫁させることであった。和宮は第一二〇代仁孝天皇の第八皇女で文久二年(一八六二)輿(こし)入れした。その時家茂と和宮はともに十六歳であった。その降嫁の条件は幕府が攘夷(外国人を追い払う)することで、その返答をするため婚儀の翌年家茂は上洛した。その時、林大學頭は將軍のブレインとして随行したのである。

『耕読堂之碑』の一文にその時の歴史的な事象が刻銘されている。「時に征夷大將軍將に京へ朝(朝廷)せんとす。余(林大學頭)は扈從(随行)の中に在り。行李(旅支度)惚忙(多

忙)として其の請(願い)を聴くに暇あらず。」

耕雲は文久二年(一八六二)に私塾『耕読堂』開設の四年後、伊勢崎の祇敬堂の講師を招聘されたため多忙になり、師に門下生の講師派遣を依頼したが、時は將軍上洛の随行で多忙によりそれは実現しなかったことが記されている。

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館だより「城南」平成21年5月15日号掲載



耕読堂の碑

51 耕読堂之碑 ② (荒口町)

『耕読堂之碑』の銘文を要訳すると次のようである。

「耕雲翁は先年、黒田周甫しゅうほを介し我が門に入った。周甫によれば、翁は幼少より学問を志し農の合間に村の子弟を教育している。

ある時、昌平しやうへい塾の門下より一人を選び耕読堂の監督を願いたいと言ってきたが、その時將軍上洛の随行で多忙な為、その願いを聞くことなく十数年が過ぎた。

先日、翁の息子初太が来て語った。『翁は普段の生活は儉約するが書籍を買うときは儉約しないので家の中は書籍で一杯になった。翁も今は六十を過ぎ、門下生が相談し翁の業績を石碑に残したいというので、林先生に是非撰文をお願いしたい』と。

余（林大學頭）は語った。『昔から金持ちの人必ずしも書籍を買わず、書籍を買う人必ずしも読まず、また読んでも必ずしも人に教えず。しかし、翁は書籍を買い、書籍を読み、そして人に教える。恐らく翁の考えは、巨万の富を遺すより一冊の書物

を残し、父母に仕え妻子を養う、人の道を知らせることの方が重要であると考えているのだと思う』と。（以下は来月号へ）

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成21年6月15日号掲載



右..耕雲が使っていた脇息

下..耕読堂の門下生が使った机



52 耕読堂之碑 ③ (荒口町)

(前月号の続き)

「翁(耕雲)の教えは貧しくとも気にせず自分の生き方を悟れば私利私欲に惑わされることはない。このように書籍から得られる財産は計り知れない。この道理は元来、学問を志す者にとつても思いも及ばないことである。翁は子孫に財産を残すための謀りごとなど全く考えず、後進の学者にとつて善きものを残そうとする篤い志がよく分かる。それが国家の教育に役立つことが少ないなどと言える訳がない。

余(林大學頭)は、その翁の篤い志を理解し、また子孫は翁の志に相応し、それを代々引き継いで忘れることのないようにして欲しい。翁は上野国勢多郡荒口の人 通称耕太郎 阿部氏 耕雲はその号なり。明治十一年歳在 戊寅二月

學齋 林昇撰文 竹宇 金田誠書

耕雲が私塾『耕読堂』を開設したのは、文久二年(一八六二)で四十四歳の時である。師の林(大學頭)昇は羅山から十二世

にあたり、羅山は家康以降四代の侍講(君主の師)となり、幕府学問所『昌平黌』を創設した。維新後、林昇は明治九年に開設された群馬県師範学校で教鞭をとり、後に女学校の教諭兼校長を歴任するなど群馬への縁を感じる。『耕読堂之碑』が建てられた二カ月後、耕雲は病により六十五歳の生涯を閉じた。

「耕雲筆による七言絶句一服」及び書き下し文



暁粧纔に罷み徘徊せんと思ふ。羅襪軽くして歩を緑苔に移す。試みに芭蕉に向かいて春信を問う。一緘の芳札誰が為に聞かんや。

耕雲書：中国明代の録明人の詩

〈訳〉

「朝の粧いを少し休んで、その辺をどこともなくぶらりと歩いてみようと思う。薄絹の足袋をはき、身も軽やかに緑の苔の上を歩いた。試しに芭蕉に向って、春の訪れは何時なのかと尋ねてみたが、その一通の返答のお便りは誰のために聞いたらよいのだろうか。」

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成21年7月15日号掲載

53 産泰神社の社殿彫刻 ① (下大屋町)

高砂 平安時代のこと、九州阿蘇神社の神主友成は、都見物の

途中で播磨国(兵庫県)の名所高砂の浦に立ち寄った。そこで

老夫婦が松の木陰を掃き清めていた。聞くと、「この松こそが高

砂の松であり、遠い住吉(大坂)の地にある住の江の松と合わせ

て『相生の松』である」と語った。翁は「媪は高砂の住人、私

は住吉の住人で、遠く離れていても心は通い合う。非情の松に

さえ相生の名がある。ましてや人間の夫婦ならば相生の夫婦に

なる」と。

そして「実は自分たちは高砂と住吉の『相生の松』の化身である」と告げ、夕波寄せる岸边から小舟に乗って沖へ姿を消した。

友成は月の出とともに小舟で高砂の浦から住吉へ向かった。住

吉へ着くと月下に住吉明神が神々しく颯爽と、悪魔払いの長寿

と君民の平安な世を祝し舞っていた。

室町時代の能役者世阿弥はこれを謡曲に作りあげた。天下太平、夫婦円満、長寿と縁起が良いことから後に好んで婚礼に謡

われた。

“高砂や此の浦船に帆をあげて(繰り返し) 月諸共に

出で汐の波の淡路の島陰や 遠く鳴尾の沖すぎて はや住の江

に着きにけり(繰り返し)”

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館だより「城南」平成21年8月15日号掲載



本殿北面下段左の「綱渡り」の彫刻



「高砂」本殿背面上段

54 産泰神社の社殿彫刻②（下大屋町）

老萊子 老萊子ろうらいしは、周時代の人で両親に孝養を尽し七十歳になっても、派手な子供のような格好で愚かな振る舞いをした。

また親のために食事を運ぶ時もわざと転んで子供のように泣いた。これは老萊子が七十歳になっても、「まだまだ私はあなたのように泣いて見守るので、どうかいつまでも長生きして見守ってください」という両親の長生きを願っての行為であった。

唐夫人 唐夫人とうふじんは、催寛さいかんの妻で姑ちやうそんの長孫夫人に仕えていたが、姑は老齢で歯がないのでいつも自分の乳を与え、毎朝髪を梳すいたり孝養のかぎりを尽していた。ある時、姑は病になり、余命幾ばくもないと悟ると一族を集め「私は今まで嫁には限りなく孝養をつくして貰った。これまでの嫁の恩に報いることなくお別れするようになる。皆もこの嫁の真似をして孝行すれば将来かならず繁栄するであろう。」と言った。皆も嫁を褒めたたえ、その後一族は姑の言葉どおりに繁栄した。

儒教を重んじた中国王朝の特に優れた二十四孝のうちの二話

で本殿の彫刻である。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成21年9月15日号掲載



「老萊子」本殿北面上段



「唐夫人」本殿南面上段

55 産泰神社の社殿彫刻 ③ (下大屋町)

関子騫 びんしけん 関子騫は孔子の弟子で幼い時に母を亡くし、父が再婚して異母弟二人が出来た。継母は実子二人を愛し継子の関子騫を憎んだ。冬に自分の子には綿入れの着物を着せたが、関子騫には葦の穂を入れた着物を与えた。ある時、関子騫は父親を車に乗せて外出した。しかし、厳寒のため次第に体は動かなくなった。その息子の様子に父は意を決し継母と離縁しようとしたら、関子騫は「母上がいなくては二人の弟は凍えます。私一人が凍えていれば弟二人は暖かく過ごせますので、どうか離縁しないで下さい」と言った。後にこのことを知った継母は関子騫の深い思いに感激し、以後は実子と隔てなく可愛がったという。

揚香 ようこう 揚香は十五歳の少女で、ある時父揚豊と山へ薪を取りに行った。すると突然虎が躍り出て今にも二人に襲いかかろうとした。揚香は父が襲われないように「天の神よ、どうか私だけを食べて父は助けてください」と必死に願う虎の首へ飛びつ

いた。この様子に虎は驚き尻尾を巻いて逃げて行ったので親子ともに助かった。

儒教を重んじた中国王朝の特に優れた二十四孝のうちの二話で拝殿の脇障子の彫刻である。

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館日より「城南」平成21年10月15日号掲載



「関子騫」
拝殿北側脇障子の彫刻



「揚香」
拝殿南側脇障子の彫刻

56 北宿の青面金剛塔（西大室町）

庚申の主尊青面金剛しょうめんこんこうが半肉彫りされている。顔面が青く塗られているので青面金剛という。像は六臂ろっぴ（六つの腕）があり正面は合掌、右上の手は輪宝、下の手は矢、左上の手は剣、下の手は弓を持つ。頭には蛇を巻きつけ、牙をむき憤怒ふんぬの形相で邪鬼を踏みつけている。

光背の上位に日輪・月輪を配し、基礎には三猿が彫られている。それは人間の体内ににいるという三戸さんしの虫が天帝てんていにその罪過ざいかを上告しないよう「見ざる・聞かざる・言わざる」の願いが込められている。上戸じょうしは頭にいて眼を暗くし、皺を増やし髪を白くするといい。中戸ちゆうしは腸ちゆうし（はらわた）のなかにいて五臓を損なって悪夢を見させ飲食を好むという。下戸げしは足にいて命を奪い精気を削ぐという。庚申の日に相集って一夜眠らずに過ごすのが庚申講である。

「北講中」、「宝曆十三癸未天みずのとひつじ（一七六三）」の刻字があり、北宿の人達により建立された。江戸時代中期の典型的な庚申信

仰の塔である。庚申信仰は、平安時代から鎌倉時代までは、もっぱら貴族社会のなかだけで行われていたが、中世末から次第に庶民の間に浸透し、江戸時代には全国的に広まった。そして供養塔の建立は室町時代末期から流行したが明治維新以降は衰退した。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成21年11月15日号掲載



北宿の青面金剛塔

57 観昌寺の石造阿弥陀像（西大室町）

阿弥陀像の頭部は螺髪らほつで肉髻にっけいが造られ、ふくよかな面相で眼は伏し目、やや丸みのある肩で納衣のうえをまとう。手は阿弥陀じやういん定印じやうぼんじやうしやういんの上品上生印じやうぼんじやうしやういんを結び、足は結跏趺坐けっかふざを組んでいる。半肉彫りの像で総高は六十四センチである。阿弥陀如来は四十八の宿願をおこし、その大願を成就して寿命無量・光明無碍むげの仏とし西方浄土の教主になったという。平安時代後期に末法思想が唱えられるなか、阿弥陀如来にすがって極楽に往生したいというこゝとで盛んに信仰された。

舟形光背には六地藏が配され線刻されている。地藏菩薩は、大地の恵みを神格化した菩薩で、もともとインドの神であったが仏教に取り入れられた。人は死後に生前の善悪の業により六道のいずれかにおもむき住むという。その六つの迷界とは、地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道の六道で衆生の苦患くげんを救うのが六地藏であるという。

六道に苦しむ衆生を救う六地藏と、極楽浄土の教主阿弥陀如

来が一体に表現されている石仏は稀有であり、室町時代のものと推定される。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成21年12月15日号掲載



光背に六地藏を有する阿弥陀如来

58 宮東の霊符尊神（二之宮町）

宮東の女堀南土手上に霊符尊神れいふそんじんを祀る石祠があり、側面に「天保十五甲辰きのえたつ（一八四四）年三月吉日」の刻銘がある。霊符尊神は、北天の夜空に輝く北極星や北斗星の北辰信仰によるもので、妙見菩薩とも習合し成立した。北極星はほとんど位置を変えないので方位や緯度の指針とされ、北斗星は斗柄とへい（ひしゃくの柄）が一昼夜で十二方向を指し、古来はこれにより時を測った。霊符尊神は災害を防ぎ福寿を増し、眼病にもご利益があるとされる。

明治政府は神仏分離政策により神道を国家宗教化した。そして神社を中心とする地域社会の構築を行うべく神社合併を奨めた。さらに明治三十九年に「神社合祀令」が勅令として発布された。それは地域に散在する神社を強制的に一カ所へ合祀するものであった。久保田藤吉（故人）は霊符尊神が合祀されてしまうのが忍び難く、それを免れるため私有地へ移転してしまった。その結果、霊符尊神は私有地の祠となり合祀されずに残さ

れた。現在も三月三日の祭りと、七月十六日の灯笼祭りは、宮東組一・二班と十字路組の篤い信仰心により受け継がれている。霊符尊神は、歴史に翻弄されつつも合祀を免れた極めて希有な神社として存在している。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成22年1月15日号掲載



合祀を免れた霊符尊神

59 荒口小学校 ① (荒口町)

明治五年（一八七二）新政府により「学制」が發布された。その理念は国民の皆が学ぶことにあった。全国を八大学区に分け、その中を中学区、さらに小学区に分け学校を作り教育を行うというものであった。この地域は明治六年荒口の観音寺に小学校が開設され十月に開講式が行われた。学区取締役は水沼村の星野耕策、八大区長市之関村の小池七郎、四小区長阿部章作および各村から戸長が開講式に参列した。通学区域は荒子・下大屋・西大室・東大室・飯土井・新井・二之宮・今井・荒口・富田・泉沢・江木・堤・東上野の十四カ村である。開講式にあたり学区取締りから左記の訓示があった。

- 一、午前九時始業、午後三時解散の事
- 一、一時間ごとに休憩ある故その時大小便ある事
- 一、授業中みだりに外出するを許さず
- 一、弁当は麦飯を持参する事

開校当初の生徒数は五十名程度で二教室であった。教員は阿

部桂太郎（霞堂画伯の父）と阿部初太（学者耕雲の息子）があたり、その後生徒の増加に伴い富田の橋本源次平と橋本清一郎および下大屋の鯉登真道が教員に就いた。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成22年2月15日号掲載



「荒口小学校」発祥の観音寺跡

60 荒口小学校②（荒口町）

生徒は登校の際に授業料として名札掛けの釘に文久銭一枚を毎日かけて置くことであった。その後、明治七年十二月に二之宮小学校が慈照院へ開設され、二之宮村と今井村の生徒が通学した。翌八年三月に最善寺へ大室小学校が開設され、東大室村と西大室村の生徒が通学することになった。十年一月に飯土井村と新井村の生徒は荒口小学校から二之宮小学校へ通学変更になった。

明治十二年に「学制」が廃止され「教育制」が發布になった。そして富田村の正法院へ登美多とみだ小学校が新設され、富田・江木・堤・東上野の四村学区となった。十三年には観音寺の荒口小学校が廃され、荒子村の川籠替戸かわこかいとへ荒子小学校が新設された。それは生徒増加に伴う対策であったと考えられる。

明治十九年、「小学校令」により尋常科と高等科の各四年制になり、尋常科は義務教育となった。その後二十二年に明治の大合併で荒砥村や木瀬村が誕生した。翌年には町村単位で学区制

が整理され、四十一年に尋常科は六年制になった。目まぐるしい変遷をたどった教育制度はようやく現在の学校制度の原型となった。最初の学校が荒口へ設置されたのは、阿部耕雲の私塾「耕読堂」により、学問的な環境が整っていたからであろう。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成22年3月15日号掲載



荒口小学校の標柱

61 前原の双体道祖神（荒口町）

前原の丁字路に安山岩の平坦面を円形に彫りくぼめ、二躰の神が半肉彫りされている。向かって右の男神は烏帽子をかぶり袂の長い衣服をまとい両手で矛を持って立っている。左の女神も袂の長い衣服をまとい、顔は男神の方を向き、両手は反対側の方向を指し示している。右下に「右福嶋 北さんたい」、左下に「村中」、裏面の右側に「天保三（一八三二） 壬辰十月吉日」と刻銘されている。

道の分岐点で村に邪気が入るのを防ぐ神を塞神さえのかみといい、それに道反大神みちかえしのおおかみが混合し道祖神となり、悪霊や道路を守り、旅人の安全を守る神になった。男神は猿田彦命さるたひこのみことで女神は天宇受売命あめのうずめのみことである。天照大御神の孫、邇邇芸命ににぎのみことが降臨の際「前方を遮るものは誰か調べよ」との言葉に天宇受売命が尋ねると「我は国津神くにつかみ、猿田彦命と申し天津神あまつかみが天降りされると聞き御先導申し上げよう」と出迎えに来た」と答えた。邇邇芸命は「宇受売命が出会った神だからその名をとって猿田彦命に仕えるがよい」といわれ、

その後宇受売命は猿女君さるめのきみとなり添い遂げた。

男神は悪霊が来たら一突きにせんと矛を持って仁王立ち、女神は両手をかざし「産泰様はこつちよ！」と言ってるかのように見受けられる。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成22年4月15日号掲載



前原の双体道祖神

62 飯土井沼と井出上明神 ① (飯土井町)

荒砥地区は赤城南麓の緩やかな傾斜上にあり、ほとんどの河川は南へ直流することから、水田の灌漑用水が極めて取りにくい地域であった。それを補うため自然湧水も利用し水田経営が行われた。その後、湧水地に築堤し河川から引水・湛水する沼が造られ、より安定供給がなされるようになった。かつて飯土井は水田の水不足に悩まされた地域で、水騒動が頻繁に起こっていたことが近世文書などから読み取れる。荒砥地区は近年、圃場整備事業によりいくつかの沼は消滅したが現在も十五の沼が存在している。

東街道を二之宮から上飯土井に進むと緩やかな上り坂になる。間もなく道は平坦になり右手に満々と水を湛えた飯土井沼に出会う。一般的に沼は谷頭の開放部分の一片を築堤することで湛水されるが、飯土井沼は特異な例で南面と西面の二辺をL字形に築堤している。もともと西側の自然堤防は小規模で多量の湛水ができないため大規模な堤が構築された。そのため築堤の西

側集落は水面より低い位置に営まれている。飯土井沼は、東西約八十三メートル、南北約二三〇メートル、面積約一九、〇九〇平方メートルの規模を有し長方形を呈している。



飯土井沼の西堤と集落

*内田憲治 (荒砥史談会)

*城南公民館だより「城南」

平成22年5月15日号掲載

63 飯土井沼と井出上明神 ② (飯土井町)

安永四年(一七七五)の『飯土井村明細帳』に、現在の飯土井沼は「がんぼりためい 鳶堀溜井 横(東西)五三間(約九五・四メートル)、縦(南北)一二〇間(二一六メートル)」と記されている。鳶堀溜井とは湧水を湧出させ灌漑用水を水田へ供給するための施設である。明治八年(一八七五) 通達で内務省地理局へ提出された資料には「溜井東西六〇間(約一〇八メートル)、南北九五間(約一七一メートル)」と記されている。ここに鳶堀という記述はなく溜井となっていることから、沼状の施設として機能していたと考えられるがその時期は明らかではない。

では鳶堀とはどのような施設であろうか。鳶(雁)は雁行がんこうというように列飛行する習性があるので、それに似たような形状の堀を掘削したものと考えられる。また、溜井は水田の灌漑のために掘られた井戸状の穴である。なお、溜井は発掘調査により古代の水田遺構に伴い検出されている。

東街道の南(現在の飯土井沼)に井(水)が湧き出すところ

があり、そこは田の上(北)で井出上いでがみと称した。渾々こんこんと湧き出す湧水は田を潤す、この現象は神なす業わざであると信じ、村人は井出上明神として崇あがめていたのである。



飯土井沼南から北方を望む

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館日より「城南」

平成22年6月15日号掲載

64 飯土井沼と井出上明神 ③ (飯土井町)

しかし、いつの頃から村人の心中から井出上明神は消えてしま
うのである。享保十二年(一七二七)の『飯土井村寺社帳』に「鎮
守稻荷大明神 二間茅葺^{かやぶ}き社殿」、また安永四年(一七七五)『飯
土井村明細帳』にも「鎮守稻荷大明神」と記載されている。

なお、文化四年(一八〇七)、代官所へ出された文書に「村の
鎮守稻荷大明神の祭礼は近年凶作続きで永い間行われず、若者
達が祭礼を実施したいと願掛けしております。内々でお願い申
し上げてきましたが許されず、これ以上祭礼の開催を差し止め
ると若者達が農作業を怠るようになり却って困ったことになり
ます。ご慈悲をもって祭礼の開催をお許し戴ければ以後十カ年
は祭礼のお願いは申し上げません」という内容で、ここにも鎮
守稻荷大明神と記されている。

さらに明治八年(一八七五)通達で内務省へ提出された資料に
「村社稻荷神社 本村中央ニアリ 祭日九月廿九日」と記載さ
れている。井出上明神の記載は全く見当たらない。このこと

は村人が鎮守を井出上明神から稻荷明神へ、つまり信仰対象の
神を変えたことを示している。その時期は江戸時代以前まで遡
る可能性が考えられる。

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館だより「城南」平成22年7月15日号掲載



井出上神社

65 飯土井沼と井出上明神 ④ (飯土井町)

井出上明神への信仰は何故失われてしまったのであろうか。

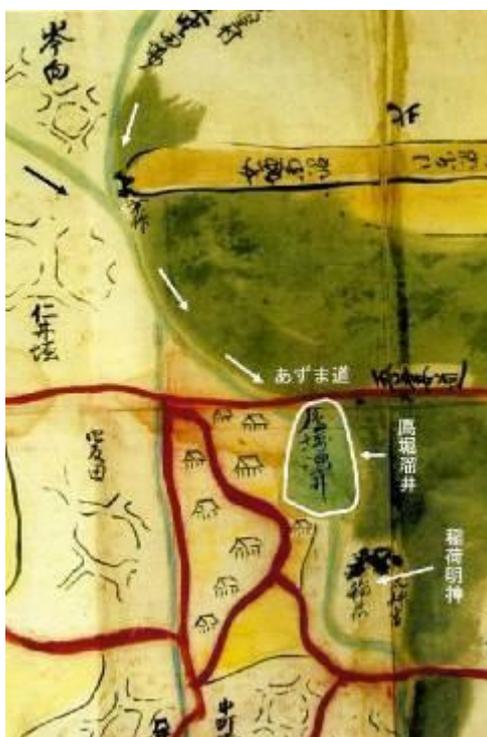
天保十四年(一八四三)の『飯土井村絵図』にその手掛りを見出すことができる。鷹堀溜井^{がんぼりためい}へ引水する堀が描かれている。その供給源は葭沼や荒子中央を流れる水路からで、より安定した灌漑用水が得られるようになった。その結果、井出上明神への神威や信仰心は失われ、豊穰を願うため稻荷明神を鎮守にしたものと考えられる。用水堀から引水したことで溜井は飯土井沼として機能したことになるが、その時期は絵図が作成された天保十四年以前に遡ることが明らかとなった。

江戸中期より荷田春満^{かだのあずまろ}、賀茂真淵^{かものまぶち}、本居宣長^{もとのおりのりなが}、後期には平田篤胤^{ひらたあつたね}により、古事記・日本書紀・万葉集等の古典文学研究が行われ、渡来した儒教や仏教以前の日本固有の文化や精神を明らかにするというのが盛んになった。このことが復古神道や幕末の尊王攘夷運動などに大いに影響を及ぼした。飯土井村に生まれた石綿常磐^{いそまわ}は井上正香に師事し、後に平田篤胤の養子鉄胤^{かねたね}の

門で国学を学んだ。また、医術も習得し医師として活動し、鎮守の官司も務めており仏式葬儀を神祇式葬祭に変えるため明治二年に県庁へ願い出た。神仏混淆^{こんぶこう}を廃止するため神仏判然令が發布された翌年であり、その受容は背景的に極めて好機であったといえる。

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館だより「城南」平成22年8月15日号掲載



飯土井村絵図(鷹堀溜井に用水路が描かれており、白矢印は溜井の導水路。右下に鎮守稲荷神社がある。飯土井町自治会蔵)

66 飯土井沼と井出上明神 ⑤ (飯土井町)

古代の信仰は自然を崇め畏れ、そして祈った。なお、山や岩や大樹には神が降臨すると信じられていた。また湧水現象も神なす業とし崇められた。そして人々は集落に神を迎え、また祈るため社殿を造った。井出上湧水も神とされ村人の篤い信仰を受けた。後に堀から引水し沼が造られたことにより、井出上明神への神威や畏敬の念は失われた。そして村人の思いは次第に豊作を願うことへ移り、倉稻魂命(稻作神)を祭神とする稻荷明神へ変更してしまった。稻荷信仰は京都伏見の稻荷神社を総社とし、稻作神・農業神のほか漁業神・商業神、また江戸時代は屋敷神になり全国に広まった。

明治十一年(一八七八)、石綿常磐は有志と諮り稻荷神社から井出上神社に復古したいと県庁へ請願した。このことは単に社名改称のみに止まらず祭神を変えることを意味する。果してその意図は何であったのか。それは『上野国神明帳』記載の「正五位上 井出上明神」という神位へのこだわりが、かつて井出

上神を捨てた村人の意を解すことなく行われたようである。なお、飯土井とは飯(稻)が穫れる土(所)で井(水)が湧き出るといふ、井出上から転じたのであろうか。いずれにしても井出上の所在は現在の飯土井沼であり飯土井町の象徴的な存在である。沼のほとりに立つ堤竣工記念碑に短歌が刻まれている。

「國能た免心徒久し乃里人出築與免多る井出乃堤を 城□」

*内田憲治(荒砥史談会)

*城南公民館日より「城南」平成22年9月15日号掲載



短歌が刻まれた堤竣工碑

67 富田の宝塔（富田町）

富田の宝塔は稻荷山古墳（荒砥三五五号墳）の噴頂部に建てられている。輝石安山岩製で、下から基礎・塔身・笠（屋蓋）・相輪の順に積みあげられ総高二〇六センチの安定感のある形態である。相輪は露盤・伏鉢・請花・九輪・龍車・請花・宝珠からなり、首部を持つ塔身は甕型で底部はすばまる。

赤城南麓の宝塔は塔身に特徴があり赤城塔と別称されている。富田の宝塔は笠に反りがあり室町時代の特徴が見られる。昭和六十一年に市の重要文化財に指定された。また、平成五年に西大室町の観昌寺、昭和五十九年に二宮赤城神社の宝塔が指定されている。神社の境内にも建立されていることから神仏習合の様子が窺える。

宝塔は、大日如来を象徴するもので、平安時代初期に密教とともに伝来した。多宝如来と釈迦如来を脇侍とし、宝塔を本尊とする一塔両尊形式とされ、天台宗系のものが多い。木造の宝塔は平安前期の弘仁十二年（八二二）に比叡山に建立されたの

が最初であるが、その後石造が多く造られ古いものは京都鞍馬寺の保安元年（一一二〇）のものが著名である。なお、塔身に四角い裳階（庇）を加えたものは多宝塔という。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成22年10月15日号掲載



富田の宝塔

68 上区寮の二十二夜塔（富田町）

上区寮は正法院の境外施設で、そこに二十二夜塔がある。基礎の上に反花かえりばなが施され、竿に「二十二夜」と刻み、上に蓮華座を載せ、その上に円盤状の塔身がある。塔身の中央に「如意輪」、右に「大」、左に「卒」と刻まれている。このような形態の二十二夜塔は極めて珍しい。二十二夜待ちの塔は主尊である如意輪観音像を彫るのが圧倒的に多い。如意輪とは、車輪を意のまま操りどこへでも自由に転がって現れ、そして迷界六道みくどろにいる衆生の苦しみを取り去り、利益を与える観音である。

この塔の円盤状の塔身は如意輪の車輪を表現している。中央の「如意輪」の左右に刻まれた「大卒たいしや」の「卒」は「車」の異体字で、大きい車を表しており、大きな車で即座に現れ衆生を救うということである。竿に「文化四（一八〇七）丁卯年十二月吉日 世話人 女人講中 是道」とある。基礎から塔身までの高さは一〇七センチである。

二十二夜塔は女人講で安産を願ってのものである。地域差は

あるが正月の二十二日と八月の二十二日の年二回、婦人が集まり、「二十二夜尊」の軸をかけ、線香をあげて礼拝する。昼はうどん、夜は混ぜご飯で講を行っていた。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成22年11月15日号掲載



特異な形態の二十二夜塔

69 天神の庚申塔と廿二夜塔（西大室町）



庚申塔 舟形光背の左右に鶏が半肉彫りされ、中央に梵字で（キリーク||阿弥陀如来）が刻まれている。「□□造立庚

「二□延寶四天（一六七六）丙辰十一月」の刻字がある。下部には二匹の猿が宝珠を持っている姿が薄肉彫りされている。

青面金剛塔（庚申塔） 塔身に庚申の主尊青面金剛が半肉彫

りされ、頭髮は火炎状に逆立ち、蛇を巻きつけ、憤怒の形相を現わしている。右手は矢・数珠、左手は鉤・剣を持ち、中央は合掌する六臂（六本の腕）像である。上位に日輪・月輪、下位の左右に鶏が表現され、最下は三猿が彫られている。「庚申□□春」、「欽吉」の刻字から検証すれば元文五年（一七四〇）建立である。庚申講は人間の体内にいる三戸（虫）が庚申の日に天帝に上告しないよう夜眠らず過ごす講である。

廿二夜塔 右膝を立て、右肘を載せ、右頬に手をあてる如意輪観音が半肉彫りされている。これはいかにしたら民衆を救い、幸せに導けるかの思案の姿勢を表現している。「女人講



廿二夜塔 青面金剛塔 庚申塔

中「廿二夜供養」「明和五戊子歳（一七六八）四月吉祥日」の刻字がある。如意輪観音は廿二夜講の主尊で、安産や子育てを祈願する女人講である。

*内田憲治（荒砥史談会）
*城南公民館だより「城南」平成22年12月15日号掲載

70 ささら橋脇の勝軍地蔵（西大室町）

勝軍地蔵は西神沢川のささら橋脇にある。圃場整備事業以前はここより南へ約一〇〇メートル地点にあった。自然石の一面を舟形光背状に造り出し、その中央に地蔵菩薩が薄肉彫りされている。普段見られる地蔵菩薩は、柔和な表情で錫杖をつき、衆生を救うべく左手に宝珠を持つ立像が多い。この勝軍地蔵は、頭かぶとに兜をかぶり大袖おおそで（鎧の肩あて）をまとい、錫杖を斜めに掲げ持つている。基壇右側に「嘉永六丑歳うし（一八五三）九月吉日」、左側に「北 大胡 赤城」、正面に九名の顧主が刻銘されている。

勝軍地蔵は、鎌倉時代に悪業・煩惱あくのうに勝つ地蔵とされ、また戦勝をもたらすということで中世の武士に信仰され、特に足利將軍家に尊崇そんすうされた。戦国時代の映画やドラマの戦陣シーンには必ずといっていいほど「勝軍地蔵」の旗が見られる。当時の武士の勝軍地蔵に対する信仰心の篤さが窺われる。

京都の愛宕神社は全国の愛宕社の総本社とされているが、愛宕権現ほんじがつの本地仏は勝軍地蔵とされ、古来より火伏せの神として

庶民の信仰も広まり、また、塞神さいのかみ・境の神として村に悪霊が入らぬように村境の路傍に造立された。一般的に石製の勝軍地蔵が造立されるようになったのは江戸時代からである。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館だより「城南」平成23年1月15日号掲載



ささら橋脇の勝軍地蔵

71 赤城神社の薬師真言塔（荒口町）

墓塔型で上位に薬師如来の種子しゅじ **唵**（バイ）、その下に十二文字の梵字が二行に刻まれている。「オン コロコロセンダ リマトウギソワカ」と読み、「オン 取り去り給え 我を守護し給え スヴァーハー」の意味で、天明五乙巳きのとみ（一七八五）歳の建立である。石造の薬師如来を表すものとして石像が多い中で、梵字のみで造立されるのは極めて稀である。

薬師如来は人々の病気を癒し、飢えている者には食事を、貧しい者には衣服を、目の不自由な者にはよく見える目を与え、国の災禍も直すとされた如来である。西方浄土にいる阿弥陀如来は来世の極楽浄土を説くのに対し、薬師如来は現世の東方瑠璃光浄土りうこうじょうどにおいて現世利益をもたらすという。菩薩であったとき十二の大願を發して成就し、特に衆生の病苦を癒し救うということから広く信仰された。医学が發展していなかった時代に衆生の薬師如来に対する信仰心は絶大であった。俗世に生きる人間は貧瞋癡とんじんち（むさぼり・怒り・無知）の三毒に侵されている重

病人であり、特に薬師如来のパワーはその病を治してくれる仏教界の医者であるという。

*内田憲治（荒砥史談会）



薬師真言塔

読み訳文

72 観音寺の輪廻幢と六地藏幢（荒口町）

輪廻幢 基礎・幢身・中台・火袋・笠・露盤・請花・九輪・請花・宝珠
 からなり、総高は二三六センチである。幢身に「一結施主敬白 延徳
 三辛亥（一四九二）十月廿一日」と刻銘されている。幢身には縦
 二十五センチ、幅六・五センチの輪廻車孔がある。ここに輪廻車という円
 形の石板を差し込んで軸でとめ、回しながら念仏を唱えると、
 衆生が三界（欲界・色界・無色界）六道（地獄・餓鬼・畜生・修
 羅・人間・天）に迷い、苦難を重ねて留まることが無くなるとい
 う。なお、中台の受けの彫り込み部分は火袋の角石と合致せず
 後補と思われる。

六地藏幢 基礎・幢身・中台・龕部・笠・露盤・請花・宝珠か
 らなり、総高は二二三センチの重制石幢である。龕部の各面に地藏
 菩薩坐像が六体薄肉彫りされている。幢身の西面に「應安四（一
 三七一）年辛亥十月廿九日」、東面に「奉造立六地藏像為□□□也」
 と刻字されているが、□部分は、判読不可能な状態である。幢身
 の為書と建立年月が刻字された面が裏表逆に設置されている。

六道に輪廻転生し苦しむ衆生を救う思想により寺院の門前や墓
 地の入口に建てられるようになった。六地藏信仰は平安時代末
 期に始まり、石幢の六面に彫られたものに比較的古いものがあ
 り、丸彫り並列の六地藏が建立されるのは江戸期に入ってから
 である。

*内田憲治（荒砥史談会）

*城南公民館日より「城南」平成23年3月15日号掲載



六地藏幢

輪廻幢